
魔法少女リリカルなのは～そよ風に想いを～

夢想旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはそよ風に想いを

【Nコード】

N3134T

【作者名】

夢想旅人

【あらすじ】

青年は、あるモノを捜し求めていた……

願いを叶える力を持った奇跡の宝石『マテリアルコア』

それは“十二個”を集めると願いが叶うと言われていた。

しかしある時、青年は『機動六課』と言われる組織の人間に遭遇し、捕縛されてしまう。

彼女達がマテリアルコアについて知ると、青年と共にコアを探すことになってしまった。

たがしかし、その先で同じくマテリアルコアを集める『騎士団』と言う組織が『機動六課』の前に立ち塞がった。

マテリアルコアを巡って“十二個のマテリアルコア”を奪い合う『機動六課』と『騎士団』の戦いが、今……幕を開ける。

そしてその最中、物語の真実が明らかになっていくのだった――

――強い想いが、人を動かす

――その想いは、何を願うのか

――願いがあるから、願いがあるから、人は強くなれる――

第一話 運命との出会い（前書き）

初めまして、作者です

この作品はリリカルなのはの二次創作となる作品です

処女作です！

なので文章が酷いかもしれませんが許してください・・・

仕事があるため、あまり更新が遅くないかもしれませんが、

この作品を読んで、皆さんが楽しめてくれれば嬉しいです

それでは、どうぞご覧ください！

第一話 運命との出会い

——とある世界

そこは、緑に包まれていた世界だった。

どこまでも木々が広がっていて。どこまでも自然が溢れている世界。

そして人が住まない、平和な世界だった。

カツン、カツン、と地面を歩く音が響き渡る。

それはただひたすらに、速度が変わることなく、淡々と。

そこは——ただの一本道だった。

入口から曲がり角が一切なく、ただまっすぐな道が続くだけの、妙な構造の建物。

それが、この世界にある唯一の建物で“遺跡”だった。

「ここか……」

そうして、遺跡の一番奥にある大きな扉の前に、一人の男が立ち止まった。

短髪よりやや長めの黒髪に、凛々しい風貌の青年。

黒と赤が特徴的なコートに身を包み、黒いズボンという服装で、その腰には刀が携えてあった。

青年がそう呟くと、石の扉を開け、部屋の中へ足を進める。

彼が入った部屋は、広場の様に広々とした部屋だった。

ただ中央に祭壇があるだけの質素な部屋。それ以外には装飾品の類は一切ない。

だが、部屋の壁や床には傷ひとつ無く綺麗で、この部屋は人を寄せつけないほどの神聖な場所なのだと感じられた。

「——あつた」

部屋に入った青年が、そこに唯一あつた“祭壇”へと視線を向け、
呟く。

正確には、祭壇に置いてあるモノへ。それは、奉るように、崇めるように、祭壇に置かれていた。

彼はソレが何か理解すると、安心したような笑みを浮かべ、祭壇へと歩み始めた。

異様なまでに綺麗に輝く、白い石。

そう、まさにそれは“宝石”と呼ばれるに相応しい代物であるのは、言うまでもないモノだった。

そして祭壇、宝石を目の前になると、青年は緊張したようにため息を吐き、

「ようやく……二個目」

そう呟いて、青年は宝石へ手を伸ばした——

「——待ちなさいっ！——」

しかし突然、部屋に彼以外の声が響き渡った。

凜とした、とても澄んだ声。明らかに女性の持っている、綺麗な声だった。

「……？」

一方、その声に青年は違和感を覚えていた。

彼としては、この場に居合わせる人物に心当たりがあった。だが、たった今聞いたその声に、青年は過去に聞いた覚えがなかったからだ。

青年が伸ばした手を止め、声のした方へ振り返る。

そして、彼が振り向いた先には――

奇妙な大鎌を持った女が立っていた。

“綺麗”としか言いようのない整った顔立ちに、二つに結っている金髪がとてつもなく似合っていて。

黒いコートとミニスカートで、同じ黒のハイソックスという格好に、白いマントを羽織っていた。

「管理局です！　そこにいる貴方！　それはとても危険な物ですから、今すぐそこから離れて下さい！」

その金髪の女は、祭壇にいる青年を見るなり、そう叫んだ。

一方、彼女から発せられた言葉に、青年は呆れたように苦笑していた。

「……嫌だと言えば？」

「なッ……！？」

金髪の女が驚いた表情で青年を凝視する。彼の返事がさぞかし意外だったらしい。

「……なら無理矢理にでも、奪わせてもらいます」

そう言って、彼女が青年を睨みながら“奇妙な大鎌”を構え直した。

黒い柄に、大きな刃が付いた大鎌。まずそれを見て第一に抱く疑問は、その大鎌の“刃”だろう。

金色に輝いている奇妙な刃。

明らかに鉄ではないその金色に輝いた刃に、青年の目がひそまった。

だが青年はそれを忘れ、考えないように目を逸らすと、急に彼女に背を向け、祭壇へ向き直った。

そして祭壇に置かれていた“白い宝石”をつかみ取り、再度彼女に振り返りながら、青年は宝石を上着の内ポケットへしまい込んだ。

「さあ……どうする？ 奪うのか？」

振り返った青年が毅然して、金髪の女を睨むように見遣る。

「貴方が渡してくれるなら、そんなことはしたくありません」

対し、金髪の女は青年の行動に動じず、彼を睨み続けた。

その彼女の反応に、青年は怪訝な顔を作って、彼女に――問うた。

「お前……騎士団か？」

彼の質問に、金髪の女が首を傾げた。

「……騎士団？ 一体、なにを言っているんですか？」

私は時空管理局本局の執務官、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

青年は聞いたことがないその名称に疑問符を浮かべる。

「時空管理局？　なんだ……それは？」

その言葉に、フェイトと名乗った女が目を細めて、彼を凝視した。まるで——その名称を知っていることが普通だと言わんばかりに。

「管理局を知らない？」

「ああ、知らないな」

青年が顎に手を当てて考えるが、彼には思い当たる節がなかった。

「時空管理局というのは、数多に存在する世界を管理・維持するための機関のことです」

金髪の女——フェイトが説明するが、青年にはいまひとつ理解が出来なかった。

「でだ……その時空管理局さんが一体、何の用なんだ？」

青年が彼女に警戒し、腰にあった刀に手をかざす。

それを見たフェイトはすぐさま身構えた。

「貴方が今持つてるその“ロストログア”を回収しに来たんです」

またわからない名称が出てきたことに、青年が不快な顔を作った。

彼女の言っているモノが何か全く理解できない。

彼自分が持っているモノでフェイトの言う“ロストログア”に該当するのは――

「……コアのことを言っているのか？」

考えた挙げ句、ようやく思い付いたことを青年は口にした。

「コア？ まさか……貴方はそのことを知っているんですか！？」

驚きを隠せない顔でフェイトが青年を見た。

彼女にとって、それが驚くことなのはすぐにわかった。

「はて？ なんのことかな？」

しかし青年はフェイトの反応を見ると、それに答えずに曖昧な返事を返した。

勿論のこと、フェイトは青年の態度が気に入らなかったらしく、彼へ凄みを利かせて言い放った。

「教えないと……無理矢理にでも連れて行つて、聞いてあげますよ？」

脅し、と解釈していい言葉に大鎌を持ったフェイトが殺気を放つ。普通なら、それに対して恐怖を抱くのが至極当然のことなのだろう。

「おお……。怖い、怖い」

だが、動じることなく微笑して青年は軽く言葉を返した。

しかしフェイトが真剣な眼差しをやめないことに、彼の顔から笑顔が消えた。

黙った青年が刀の柄を握り締める。しかし刀を抜かずに、腰を低くして戦闘体制に入った。

対して、フェイトは鎌を両手で構え、飛び出すように身体を前に傾けた。

互いに体制を崩さず、相手を見て様子を窺^{うかが}う。

そして互いに、理解した。

理由は分らないが、お互いに譲るところなど一切無く。話し合いなどでは毛頭解決するわけもない。

結果、戦うことが解決する方法になる。

だから二人が待つのは……戦闘が始まる瞬間、合図だけだった。

その数秒と言う時間は、二人にはとても長く感じられただろう。

だが次の瞬間、その沈黙は壊され、始まりを告げる。

「はぁッッ!!」

先に動き、先手をフェイトが取る。僅か10M程の距離を一瞬で詰め、青年へ横一線に大鎌を薙ぎ払った。

「——ッ」

青年が後ろに跳び、それを回避する。

そこから更に追撃する為、フェイトはすぐさま彼の間に合いに入り込み、次々と大鎌を振るった。

青年が迫る彼女の大鎌を避け続ける。そうして何度か躲すと、彼は後ろへ大きく跳び引いた。

距離を取った青年がまた再度刀の柄を握り、抜かず、先程よりも腰を低くして構えた。

「……？」

そんな妙な構えをした青年に、フェイトが不思議がりながら、警戒した。

何故、この状況で彼は刀を抜かないのか？

そう考えても、フェイトは止まらなかった。いや、止まろうとは思わなかった。

何かする前に潰してしまうしかない。

「——ッ——！」

フェイトが地面を踏み付けて前へ跳び出し、動こうとしない青年に一気に近づく。

そして目にも留まらない速さで、フェイトが青年に目掛け、大鎌を払った。

迫り来るフェイトの攻撃に対し、青年は動こうとはせず、彼女の
大鎌は彼の回避が不可能な一撃となった。

——当たるッ！

必ず当たると信じた一撃にフェイトが勝利を確信した。

「抜刀壱式——」

だがその瞬間、彼女のそれは思いもしない形で壊された。

「……………なッ！？」

フェイトの大鎌が彼に当たる瞬間、彼女の腕に強い衝撃が走る。

そして彼女が気がつく、自分の身体が進行方向とは真逆の向きに、吹き飛ばされていた。

「くっッ！！」

7m程飛ばされた辺りで、フェイトが地面に落ちる衝撃を受け身で逃がし、膝について屈んだ姿勢のまま、すぐさま青年へ視線を向けた。

「――一閃」

何かを呟いた青年は、刀を横に振り切った状態で、止まっていた。それを見ていたフェイトは一瞬、理解が出来なかった。

刀を、振り切っている？

ならあの腕に走った衝撃は、自分の武器と彼の武器がぶつかったことだ。

ということとは――

「な……！？」

そうしてフェイトはようやく状況を理解して、驚愕した。

自分は弾き飛ばされた、と。

フェイトの大鎌が当たる寸前に、彼が自分の鞘から刀を抜き放った一撃で、彼女を弾き飛ばしたのだ。

「えっ!？」

しかしその時、呆気にとられていたフェイトが呆然としていて、刀を持ったまま青年が入ってきた扉へ走り出した。

突然の逃走にフェイトの反応が遅れ、彼女が動くまでに数秒の間差が生まれる。

青年は扉を抜けると走り抜けずに立ち止まり、振り返った。その扉は、彼から見れば引き戸になっていた。

「やばっ!」

青年のやろつとしていることをフェイトが察したと同時に、彼は脚で両開きの扉を蹴った。

そして扉が閉まる直前に、青年はゆっくりと口を開いた。

「……残念だったな」

ボタン、と大きい音を立てて扉が完全に閉まった。

「このおッ!!」

その閉じた扉を、フェイトが押し開けようとする。

だがしかし、外側から止め具がしてあるらしく、彼女を閉じ込めた扉が動くことはなかったのだった。

第一話 運命との出会い（後書き）

さて……どうだったでしょうか？

まだプロローグに当たる部分ですので、なんとも言えませんよね。

もしこれから続きを読んで、何か感じたり、思ったりしたら感想などくれたら

作者は飛んで喜びます！

辛口過ぎた感想もいいですが、僕の心を折らない程度にお願いします！

第二話 紫炎の剣（前書き）

今の所は、まだプロローグに当たる部分の話です

本編はもう少しですので、気長に読んでやってください

第二話 紫炎の剣

遺跡の中を、青年が全力で疾走する。真つすぐな遺跡の道をひたすらに。

彼がフェイトを閉じ込めてから十分ほどが経過していた。

だがそれだけの時間を走っても、今だに青年は出口を確認するこ
とが出来ていなかった。

遺跡の入口から広場に着いた時の距離・時間を考えると、そろそ
ろ出口が見えていいはずだった。

「まだか？」

走り続けている青年が、愚痴をこぼす。
だが、青年がそう呟くと――奥の方から小さな光が見えはじめて
きた。

――出口だ。

青年がそれに近づいていくと小さな光は次第に大きくなり、彼は出口を駆け抜けた。

「う……ッ！」

すると、青年の目に太陽の光が降り注ぎ、暗闇に慣れていた彼の目が眩んだ。

「——覚悟ッ！」

瞬間、青年の前になにかが立ち塞がった。ようやく視界が戻った彼が気づく頃には、それはすでに剣を振り下ろそうとしていた。

「な……ッ！！！」

反射的に青年が左に跳ぶ。

それにより、敵の剣は当たらずに虚空を切る。青年は自分の目が早く光に慣れたことに、心から感謝した。

青年が更に敵から離れて距離を取り、攻撃した敵を睨む。

「——よく避けれたな」

どこか機械じみた妙な剣を構えながら“女”は驚きつつ微笑した。
髪型は長い髪を後ろで結っているポニーテール。

服装は白と赤を組み合わせた衣服に所々に鎧が付いているという
格好をしていた。

そして風貌は、これまた先程のフェイトと同様に、美人だった。
凛々しいその風貌は、フェイトとは違う種類の美しさ。

だが、その凛々しい風貌の揺らぎのない鋭い目は、まさしく武人
の目で。

その瞳は彼女のその凛とした風貌に、絶妙なまでに合っていた。

「自分の幸運に感謝するよ」

そんな彼女に青年は、驚きながらも戦闘体制に入った。
刀を抜かずに、腰を低くして避ける姿勢で構える。

「そうだな……ところで聞きたい事があるんだが？」

女が構えた姿勢を変えず、唐突に青年へ問い掛けた。

「なんだ？」

「テスト……と言ってもわからないか……質問を変える。
先程、そこに金髪の女が入って行ったのだが……貴様、見てないか？」

遺跡の入口を指すその女の質問に、青年の眉が少し動く。
その問いに、青年は彼女の“言いたいこと”を理解し、笑みを浮かべて答えた。

「そうだな。今頃、一番奥で閉じ込められているんじゃないのか？」

同時に、青年が左に跳ぶ。

彼が先程居た場所では、すでに女が剣を振り下ろしていた。

「さつさと片付けようか？」

女が跳び、青年に向かって横一線に剣を薙ぐ。

彼女の剣が青年の胸を切り裂く前に、青年はカクンと膝を曲げて屈んだ。

青年の頭上を彼女の剣が通り抜ける。そして彼はまた後ろへ大きく跳び引いた。

「ほお……良い動きだな。せっかくだ、貴様の名前を聞いても良いか？」

青年の素早い動きに、女が感心しながら笑みを作る。
その笑みに違和感を覚えながらも、彼は言葉を返した。

「……アレスだ」

“アレス”と名乗った青年が柄を握り、刀を抜かずに構えた。

「アレスか……私は、シグナムだ。覚えておけ」

甲冑の女“シグナム”が剣を構える。彼女が放つ殺気は、今すぐに戦いたいと言っていた。

そこで、青年はようやく先程まで感じていた違和感の正体に気づいた。

これは、戦うことが好きな者の気迫・笑みだと。

「仕方ない……付き合ってやるよ」

アレスが構えた状態から動かずに、シグナムへ微笑む。

その笑みにシグナムがやや驚いたが、アレスを同じくなにか納得したように苦笑すると、彼へ微笑んだ。

お互いの行動に、お互いがひとつのことを理解する。

——こいつは“戦い”が好きな奴だ、と。

そうして二人の顔から笑顔が消え、真剣な顔つきになっていく。

準備は万端。後は、始まるのを待つだけだった。

「——参るッ！！」

大地を蹴り、先にシグナムが駆けた。

速度はフェイトよりやや遅いが、その気迫はフェイトよりも凄まじい。

それだけで、アレスは肌が震えるのを感じていた。

「はぁッ！！」

すぐに間合いに入ったシグナムが、大きく踏み込み、剣を振り下ろす。

一方、アレスはフェイトに使った技を繰り出す為、腕に力を込めていた。

「抜刀、壱式――」

シグナムの振り下ろす剣が身体に当たる寸前、アレスは鞘から刀を全力で抜き放った。

「一閃ッ!!」

ガギン、と。アレスの刀とシグナムの剣がぶつかる。

アレスの放った勢いはシグナム本人を後ろへ弾き、吹き飛ばす――はずだった。

「なッ……!?!」

しかしアレスは驚愕し、目を見開いた。

当たれば、間違いなく必殺の一撃。

だが、シグナムは吹き飛ばす身体を足に踏ん張りを効かせ、後ろに数メートル引きずることで、身体に掛かった勢いを無理矢理止め切っていた。

「ッ！ 良い一撃だッ！！」

シグナムが止まると同時に前に跳び、アレスに迫る。

「チッ……！！」

迫り来るシグナムに、アレスは余儀なく応戦を開始した。
剣と刀がぶつかり、火花を散らす。

そして何度か打ち合うと、二人は動かず、押し合うように鏖ぜり
合った。

「貴様、面白い技を使うのだな……」

楽しそうにシグナムが笑う。

その楽しそうな声は、アレスにとっては障害の他にならなかった。

「……そうかい？ まあ、吹き飛ばずにアレを止めたアンタは凄いな。さっきの金髪は吹っ飛んだぞ？」

「油断したのだろうな……フッ……それでは、そのお礼に私の力

を見せてやるっ」

そう言うときグナムは、鏢ぜり合いから剣を離し、後ろに跳んだ。

「レヴァンティン！」

グナムが剣を鞘に戻す。

同時に彼女が何かの名を叫ぶと、それに呼応して彼女の剣から機械的な声が響いた。

> Explosion! <

『レヴァンティン』と呼ばれた彼女の剣の鏢の一部がスライドし、空の弾丸が落ちる。

そしてグナムが鞘から剣を引き抜くと“炎”を纏った剣が姿を現した。

それは、まるで触れたモノを焼き尽くす灼熱の“紫炎”だった。

彼女は構えると、高く飛び上がり、剣を大きく振り上げた。

「マジかよ……」

アレスがグナムの剣『レヴァンティン』に目を疑う。

彼女の紫炎を纏うあの剣は、まさしく異様だった。

そこに更に、武器が勝手に喋っている。

こんなことを見せられて、驚かないわけがない。
だがしかし、アレスには驚いている暇などはなかった。

「はぁぁッ!!」

シグナムが空中からアレスに向かい、剣を振り下ろす動作に入る。

「ッ……!!」

アレスはすぐに刀を鞘に戻し、腰を低くして身構えた。

「紫電——」

そしてその声と共に、シグナムは『レヴァンティン』を空中から振り下ろした。

普通に喰らうだけでも高威力の攻撃を、空中から体重を乗せて威力を上げて放つ、シグナムの一撃。

アレスにとっては、絶対に当たってはいけない一撃だった。

「抜刀壱式——」

それに応戦する為、アレスはすぐさま柄を握る手に力を込め、全力で刀を抜き放つ。

自身の持つ技名を、二人が叫んだ。

「「一閃ッ!!」」

凄まじい威力の剣と刀が衝突する。

その衝撃があまりに大きすぎた為、一瞬の間にアレスを中心に大地が窪^{くぼ}んだ。
堪えるだけで精一杯のシグナムの一撃に対し、アレスは全力で刀を振り切り、弾き返そうとする。

だが、シグナムも同じく吹き飛ばされてるのを防ぎ、敵を斬り伏せる為、剣に力を込めていた。
お互いの力が拮抗し、二人が数秒ほど押し合い、競り合っている
と、

「……!?!」

瞬間、アレスの目が大きく開いた。

二人の競り合いのなか、シグナムの一撃にアレスの刀が耐え切れず、彼の刀身にヒビが入った。

このままでいれば、確実に彼の刀の刀身が真っ二つに折れてしま
う。

「このおッー！」

咄嗟にアレスが刀をずらしながら、右足を軸に左足で回し蹴りを
シグナムの横腹に当てる。

だが彼の蹴りはシグナムに当たることはなく。彼女は剣を左手で
持ち、右腕で“紫色の光”を纏いながら防御した。

「くぁッー！」

しかしそれでもアレスの蹴りの勢いは止めれず、空中にいたシグ
ナムは蹴られるまま横に飛ばされた。

それを彼女が上手く着地し、体制を立て直した。

その攻防の結果、二人に距離が開く。

だがそれは、お互いが一瞬で詰められるほどしかない僅かな距離
だった。

アレスは、出来たその隙にヒビの入った刀を鞘に戻し、構える。
対し、同じくシグナムも鞘に戻して構えた。

「あそこからの蹴りは流石だ。それに……さっきの一撃も威力が上がってるな」

シグナムが笑みを作り、アレスに話しかける。

「本気でやったからな。というかアンタ、ずるいな。剣がしゃべるわ。変な弾使うわ。」

さっきの炎もそれで出したんだろ？」

苦笑しているアレスが自分の考えをシグナムに話す。
シグナムが弾丸を使用した瞬間に、彼女の剣から炎が発生したのだ。なら、その考えは当然の結論だろう。

「そうだ……貴様はデバイスは持っていないのか？」

聞き慣れない単語に、アレスは首を傾げた。

「デバイス？」

その反応にシグナムが驚いていたが、それを理解した彼女は頷きながら一人感心していた。

「デバイスやバリアジャケット無しでその力だと？ 敵ながら素晴らしいな」

明らかに嬉しそうな声の彼女に、アレスは不思議に思った。

彼は『デバイス』、『バリアジャケット』と言っのが何か知らない。

ゆえに、それが無いことのどこが素晴らしいか、なんて理解できるわけはなかった。

「知らない間に褒められているみたいだな……礼を言いわせてもらうよ。ありがとうございます」

「礼を言われることでもない。だが、貴様はこんなに時間を使っても良いのか？

名残惜しいがそろそろ……」

遺跡の入口にシグナムが視線を向ける。

アレスが察するに、フェイトがこちらに向かってきているのだろう。

「もう出てきたのか？ じゃあ俺は逃げさせてもらっよ。
アンタと戦うと身体が持たないからな」

「身体じゃなく剣の間違いじゃないか？」

笑みを絶やさずに、シグナムが告げた。

察していたようで、アレスも先ほどと変わらない態度で返した。

「やっぱり気づくか……」

アレスの柄を握る手に力が入る。

彼が持つ刀の強度は、あと一撃耐えられれば上々と言ったところだった。

「もう一撃も耐えられないと見るが……？」

的を射た言葉に、アレスが奥歯を噛み締める。

完璧に読まれている。

だが、あと一撃耐えられるというのは、それはまだ闘うことが出来るということだ。

「なら、試すか？」

アレスが先程よりも、更に腰を低くし構えた。
シグナムも応戦するべく構え、剣に向かい叫んだ。

「レヴァンティン！」

>Explosion!<

レヴァンティンが硝煙を上げ、空の弾丸が地面に落ちる。
彼女が剣を抜くと、また紫炎を纏った剣が姿を現した。

よく見れば、彼女を中心に地面から紫色の正三角形の陣が浮かび上がり、回っていた。

「まるで魔法みたいだな」

知らない間に、アレスが声を漏らした。

「本当に魔法なんだがな」

シグナムが微笑して答える。

彼女は、この闘いを愉しんでいた。

久しぶりの強者との闘いに、身体を奮わせて。

その静かな、数秒しかない沈黙に。

耳を澄ませば、遺跡の入口から何かが飛んでくる音が響いていた。

残り時間はもう僅か――

それを知ってシグナムは先に跳び出した。

だがしかしそれよりも早くアレスは、動き出していた。

「抜刀――弐式ッ――!!」

シグナムとはまだ距離があるはずなのに、アレスが身体を後ろに思いつき捻る。

身体の全体重を乗せ、渾身の力でアレスは刀を振り抜いた。

「――衝破ッ！！」

周りの木々が激しく揺れ動き、アレスから風の壁が吹き出した。

まさしく“暴風”と言っても問題ないほどの風が、シグナムへ襲い掛かった。

風という見えない攻撃にシグナムは反応出来ず、彼女は落ち葉の様に吹き飛ばされた。

だが所詮、それはただの風である。

ゆえに身体に傷は出来ず、そのままシグナムは木に背中をぶつけた。

「がはっ……ッ……！！」

シグナムの肺から酸素が吐き出される。彼女は背中中の激痛に耐え切れずに、そのまま力無く倒れ込んでしまった。

彼女を通り抜けた暴風は勢いを止めず、更に周りの木々を揺らし

た。

凄まじい轟音を響かせて。

——パキン

轟音が収まると、同時に鉄が折れる音が響いた。

地面に、折れた鉄が突き刺さる。

アレスが放った技に耐え切れなかった彼の刀はそれを最後に、武器としての役目を失ってしまったのだ。

「チツ……！」

舌打ちしたアレスが折れた刀を鞘に戻し、シグナムに背を向けて走り去る。

終わった戦場の地面には、戦いを終わらせた折れた白銀の刀身が、光輝いていた。

第三話 赤の鉄槌（前書き）

この話でようやくプロローグが終わりです

第三話 赤の鉄槌

フェイトがどうにか扉をこじ開け、シグナムのいる遺跡前に急いで飛んでいく。

意思を通じ合わせて会話する“念話”では逃走した青年と戦っている、とシグナムは言っていた。

だがしかし先程から、彼女から念話の返事が返って来なくなっていた。

フェイトはデバイスを持たず、魔法も使わない彼に心から驚いていた。

気絶させる為に近き、本気で攻撃した瞬間、身体が吹き飛ばされていた。

完全に油断した挙げ句、逃走されてしまった失態がフェイトは悔しかった。

彼は一体、何者なのか？とフェイトが考える。

だがこれといった理由は浮かばず、フェイトは更に速度を上げた。

「うわっ……!？」

そしてすぐに出口が見えて来ると、突然出口から突風がフェイトを襲った。

自身を守る盾“シールド”を自分の前に展開し、フェイトが風から身を守る。

「凄い風……シグナムに何かあったのかも」

風が収まり、フェイトが出口を抜ける。

外の光に目が眩みながらも、彼女が辺りを見渡した。

すると、広場の一角に窪^{くぼ}んだ木の近くで、倒れている女がいた。

言うまでもなく、シグナムが倒れていた。

「——シグナムッ!？」

まだ“彼”がいるか警戒し、再度周りを見渡す。

だがシグナム以外には誰もいなく、離れた所に折れた刃が地面に刺さっているだけだった。

安全だとわかったフェイトはすぐにシグナムの所へ駆け出し、彼女を抱き寄せた。

「シグナムッ！ シグナムッ！！」

身体を揺らしながら、何度も叫ぶとシグナムはうつすらと目を開けた。

気絶していただけらしく、彼女の身体には切り傷はひとつ無かった。

「テストロッサか……？ アイツは…… “アレス” はどこに？」

倒れたまま、シグナムが軽く咳をする。

フェイトは“アレス”と言う名前が、先程の青年と理解して現状を伝えた。

「わからない。でも近くになのはとヴィータが待機しているからなんとかしてるかも……」

「そうか……ならさっさと追いかければな」

それを聞いたシグナムがすぐに立ち上がった。

「大丈夫なの？」

フェイトがシグナムの身体を気遣うが、それを気にすることなく彼女は歩きだし、折れた刀身の前で止まった。

名残惜しいように、シグナムがそれを見つめていた。

「身体はもう大丈夫だ。早く追いかけよう」

「……わかった」

そうして二人はアレスを探すため、空へ飛んで行った。

森の中をアレスは全力で駆け抜ける。

シグナムを退け、彼が走り出してから二十分ほどが経過していた。だがそれなのに、先程居た遺跡はアレスが振り向けばもう見えなくなり、約十キロの地点で彼は足を止めた。

息切れする様子もなく、彼は鞘から刀を抜いて刀身を確認する。

彼の刀の刀身は、真ん中から綺麗に折れていた。

もう使い物にならない。

これはシグナムの技『紫電一閃』がどれ程の威力を持っているのかは、一目瞭然だった。

「駄目だな。逃げるしかないか……追いつかれたら終わりだ」

刀を鞘に戻し、またアレスは森の奥へと走り出した。

「!？」

それからしばらくアレスが走っていると彼は突然、右へ跳んだ。
同時、アレスの真横を赤い弾が数発通り抜ける。
その弾は近くの木に当たると凄まじい音を立てて薙ぎ倒された。

そしてアレスが避けている無防備な状態に、今度は桜色の弾丸が
五発降り注いだ。

「——このおッ!！」

アレスが身体を捻り、腕の力で地面を押し上げる。それにより、
彼は身体を高く飛び上げることによって桜色の弾を回避した。

着地すると彼はすぐに柄を握り、構える。

しかし彼の持つのは折れた刀で、構えても戦えない。それはもはや、ハッターに近い行動だった。

「おお、よく避けれたな」

アレスの頭上から声が響く。

彼が上を見上げると、いつの間にか目の前に赤い塊があり、何かで彼を殴りつけようとしていた。

後ろに跳び、アレスが敵の攻撃を避ける。

地面に、赤い塊の一撃が当たる。それによって付近一帯に煙が舞い散った。

舞っている煙のせいで、アレスの視界が塞がれ、彼の行動が制限された。

「今だッ！　なのは！！」

赤い塊から声が発せられた時にはもう遅く、アレスの両腕は動けなくなっていた。

いつの間にか桜色の輪がアレスの両腕を縛り付け、身体に押さえ付けていた。

「なあ……！！？」

突然のことに、アレスが驚愕する。

一体、自分はどやって捕まったのか、理解出来なかったからだ。

わざと回避させて動けなくなった所から、更に煙によって視界を封じ、“何かしらの方法”で瞬時に拘束。

敵が自分を拘束した方法は今だ不明だが、戦術としては充分だった。

敵の作戦に面白いように引つ掛かった自分に、アレスが奥歯を噛み締める。

これは完璧に、アレスの敗北を意味していた。

徐々に煙が晴れていくと、上から髪を二つに結った、フェイトと同じ髪型をした女が降りてきた。

この人物も、これまた“美人”だった。いや、彼女においては“可愛い”というのが適切かもしれない。

フェイトとは逆に白で統一された服装。白いジャケットに、足首までのロングスカート。

そして手には、先端に赤い玉が付いている妙な杖を持っていた。

同じように、森の奥から煙を作った赤い塊が歩いて来る。

子供の背格好に赤い可愛らしい服、一般的にゴスロリと言われる格好。

それに同じ色の赤い帽子を被り、手には柄の長いハンマーを持っていた。

だが幼い容姿でも鋭い目は、シグナムと同じ武人のモノだったが、しかし見た目は可愛い子供でしかなかった。

「なのは……コイツがフェイトとシグナムが言ってた奴か？」

赤い子供が“なのは”と呼ばれる白い服の女に話しかけた。

「うん。そのはずだよ？ 特徴も全部合ってるし」

なのはと呼ばれた女は地面に立ち、アレスに視線を向けた。

「コイツがシグナムを倒したってかあ？ 信じらんねーな」

ハンマーを肩に担ぎ、アレスを見ながら赤い子供がぼやいた。

「失礼だよ。ヴィータちゃん」

なのはがそう言って赤い子供を^{たしな}窘める。
ヴィータと言う赤い子供は特に気にせず、ハンマーの先をアレスに向けた。

「良いんだよ。じゃあさっさと連れていくか？」

「待つて！ その前にお話してみないと……」

「めんどくさいな……わかったよ」

彼女の言葉に、ヴィータが呆れながらハンマーを担ぐ。

なのははそれを確認すると手に持つ杖を下げ、アレスと向き合った。

彼に“戦闘の意思はない”と伝えたいのだろう。

ナノハ「時空管理局、機動六課の高町なのは一等空尉です。貴方の名前を聞いて良いですか？」

視線だけを巡らして、アレスが逃げる機会をうかがう。
そして少しでも時間を稼ぐ為に、彼女の質問に答えることにした。

「アレス……アレス・ラインハート」

アレスが腕に力を込め、拘束している桜色の輪を壊そうとするが、びくともしない。とても頑丈な拘束具だ。

「アレス君か……なんでアレス君はロストログアを持っているんですか？」

なのはの言葉。フェイトから出た同じ名称に、アレスが顔をしかめた。

「あの女も言っていたが……一体ロストログアってなんだ？」

彼の答えに、なのはが目を細めてアレスを見た。

フェイトと同じく知っていないのが変だ、というような顔だった。

「……ロストログアって言うのは、過去に何らかの要因で消失した世界で造られた遺産の総称です。

私たちはそれを悪用されないように回収・管理するのがお仕事なんですよ」

なのはが不審がりながらもアレスに説明した。

簡単に言えば、ロストログアは“悪用されるほど危険な代物”ということのようなのだ。

「俺はそんな物騒な物は持っていないな」

首を傾げながら、アレスが答えた。

それを聞いたヴィータがハンマーをアレスに向け、殺気を放った。

「嘘言つてんじゃないよ！」

お前が持つてるのはわかってんだよッ!!」

ヴィータのその反応で、アレスは遺跡で手に入れた物のことを言っているのだと思った。

「まさか……コアのことを言っているのか？」

「「コアあ？」」

なのはとヴィータは一緒に声をあげた。

「コアってなんですか？」

二人を代表してなのはがアレスに問う。
彼は軽くため息を吐くと、

「宝石のことだろ？」

「見せるからこの拘束、解いてほしいんだけど？」

上手く言葉を選んでなのはに拘束を解くことをアレスが要求した。もし拘束が解かれたら、すぐ逃げるために使う道は確認済みだった。

「それは出来ないんだよ」

「お前、絶対逃げるだろ？」

「……………」

考えが読まれている様な二人の反応に、アレスはガクンと頭を下げた。

「で、どこにしまってたんだ？」

そんなアレスの気持ちに気づくことなく、二人はアレスに寄って行った。

「……上着の、左内ポケット」

観念したアレスが宝石の隠し場所を伝えた。

そしてなのはが彼の内ポケットにある宝石を取るため、上着の中に手を入れると――

「ひうつ!？」

突然、彼女は妙な声を上げて後ろに跳び引いた。

「どうした？」

何もしていないのに後ろに下がったなのはをヴィータが啞然と見る。

「……………」

「どうかしたか？　なのは？」

反応が無い彼女にヴィータが心配して再度声をかけるが、なのは顔を赤くしていた。

「な……で……?」

なのはの囁きに、アレスとヴィータが首を傾げた。

だが、すぐに彼女は大きな声で叫んだ。

「なんで上着だけしか着てないのぉ〜!?!」

ようするに、なのは的に言うとアレスの服装に問題があったらしい。

彼の上半身はシャツを着ておらず、直に膝までの赤と黒のコートを羽織っており、そこから更に腰の辺りを黒の太い紐でベルトのように縛ってあった。

つまりは、内ポケットに手を入れようとしたら、いきなり男性の肌に触れていたので反射的にのけ反ってしまった、と言ったことらしい。

「なのはも女の子だな」

ヴィータは呆れ半分、笑い半分で苦笑していた。

「いきなりじゃびっくりするよぉ〜！」

顔を更に赤くしてなのはが叫ぶ。

そんな彼女を不覚にも可愛いなど、アレスはこんな状況で思ってしまった。

それからしばらく経ち、なのはが緊張して取れないのを見兼ねて、代わりにヴィータが取ることになった。

取るときヴィータの頬がほんの少し顔赤くなっていたが、アレスは気にしないことにした。ヴィータが内ポケットから宝石を取り出して、呟いた。

「お前、ちゃんと鍛えてるんだな……」

アレスの上着の隙間から見える筋肉はしっかりと引き締まっていた。

それはシグナムとフェイトとの戦いを振り返れば当然だと言えるだろう。

「これがコアってやつか〜」

ヴィータの手に持つ、直径三センチ程の白い宝石をなのはと二人が眺める。

「……綺麗だね」

白い宝石は綺麗に輝きを放っており、その魅了されそうな美しい宝石に、なのはは自然と言葉を漏らした。

その後、二人はコアと呼ばれるロストロギアを見ながら、話し合っていた。

アレスは、その二人をただ眺めているだけだった。

「そういえばフェイト達はどうしたんだ？」

「フェイトちゃん？ さっき連絡したよ？ すぐ来るって」

なのはの言葉に、アレスの額にシワが寄る。“フェイト達”というのは、フェイトとシグナムの事だろう。

この二人にフェイトたちの四人が居ては、もう逃げることは不可能だ。

それに、アレスには戦える武器もない。

「じゃあ詳しいことは、はやてに会ってからだな」

「そうだね。色々活発になってきたテログループとかもあるし、もしかしたら何か関係あるかもしれないから」

話し込んでいる二人を見て、アレスはふと思った。

逃げれるんじゃないかと。

二人はアレスから三メートルしか離れていない。
だがしかし、右にある細い道に行けば、入り組んだ森を利用して逃げれる可能性があった。

（やるしかないよな……）

アレスがひとり決心する。

逃げるチャンスは一度だけ。
アレスは機会を待った。

「あ……！ フェイトちゃん来たみたい！」

なのはたちの頭上からフェイト達が降りて来たらしく、二人の視線が上を向いた。

この瞬間、二人の視線がアレスから外された。

（今ッ！！）

両腕を塞がれている状態のアレスが立ち上がり、走り出す。目指すは先程確認した道。アレスは全力で駆けた。

「ん？」

なのはとヴィータの二人が気づく頃には、もうアレスは道に入ろうとしていた。

「な……！！？ てめえ！」

早く反応したヴィータがハンマーを持ち、飛び出した。アレスが道に入ろうとするのをヴィータは止めに入った。

「なに逃げようとしてんだ！ この野郎ッ！！」

後ろから凄い気迫でヴィータが迫り来る。
彼女たちに連れて行かれるととてもなく面倒なことになる、と
アレスは思った。

「厄介事には巻き込まれたくないんでね」

走りながらアレスがヴィータに答える。
そんな彼の態度が彼女の坎に障ったのか、

「野郎……もう怒ったぞ！ アイゼン！！」

ヴィータが叫ぶとシグナムの『レヴァンティン』と同じくハンマー
から声が聞こえた。

>Explosion!<

そう聞こえるとシグナムの『レヴァンティン』と同じく『アイゼ
ン』と呼ばれたハンマーの先の柄がスライドし、硝煙を上げた。

「ヴィータちゃん！？」

驚いているのはを無視してヴィータがアイゼンをアレスに向け、

言い放った。

「アイゼン!!」

> R a k e t e n f o r m ! <

アイゼンと呼ばれるハンマーが変形し、片方が噴射口になりもう片方には角の様な尖った物が現れる。

アイゼンの噴射口がロケット噴射を開始し、勢いよくヴィータが回った。

「ラアーケテン!」

数秒で四回転ほどすると、その勢いを乗せて、ヴィータがアレスへ突撃した。

加速したヴィータがアレスの予想を遥かに超えて移動する。

アレスが振り向けば、もう目の前にはアイゼンを振り上げたヴィータが居て、彼は彼女の攻撃範囲内に居た。

「ハンマアアー!!」

ジェット噴射されているアイゼンを加速されたまま、彼女がアレスへ振り切る。

桜色の拘束具に両腕を防がれたアレスに、防ぐ術などは勿論なかった。

「やっぱりそれで殴るのかぁー!!」

ヴィータのアイゼンがアレスの胸へ綺麗に当たる。

「ぐはぁっ!!」

殴られると、彼は木々を薙ぎ倒しながら吹き飛んで行った。
地面を跳ね、木にぶつかり、また地面を跳ねて、木を薙ぎ倒す。
そして最後に、地面に背中を強打して倒れた。

「あがつ……!」

そうして、アレスは殴られた激痛と背中に走った激痛に耐え切れず、気絶した。

「うわぁ……」

彼が吹き飛んで行く一部始終をしっかりと見ていたなのはが呆然と

する。

人間がボールみたいに跳ねているのを見れば、嫌でもそうなるだろう。

彼女の後ろにはフェイト、シグナムが居て、二人も同じく呆然としていた。

「大丈夫かな？ あの人……」

フェイトが重い口を開く。

「アレスはデバイスも持ってないし、バリアジャケットを着けていないからな……非殺傷設定でも重傷じゃないか？」

シグナムもフェイトと同じく呟いた。

そしてしばらくすると、アレスを引きずってヴィータが戻って来た。

「あゝスッキリした」

なのはの所に戻ると、彼女は引きずったアレスから手を離れた。バタリ、と力無くアレスの身体が仰向けで地面に転がる。

よく見ればアイゼンが当たった胸の辺りが真っ青に腫れ上がり、身体も木にぶつかったりしたせいで打撲や擦り傷が数え切れないほどあり……

文字通り“重傷”としか言えなかった。

なのはたちが痛々しいアレスを凝視する。

本当に生きているかさえ疑問に思いたくなる姿だった。

「非殺傷設定だから思いっきり殴っちまった」

アレスの状態に気づかないヴィータが、なのは達の表情を見て疑問を抱いた。

「お前ら、どうしたんだ？」

啞然する三人のなか、唯一シグナムが反応した。

「ヴィータ……ソイツはデバイスも持っていないければバリアジャケットも着けてないんだ……そんな状態の人間をアイゼンで殴ったら、どうなる？」

非殺傷状態とはいえ、あれだけの威力の攻撃。

防具服や身を守る装備を着けていない人を、アイゼンで殴れば大怪我は免れないだろう。

「あ……！　そっぴゃコイツ、バリアジャケット着けてないんだっ

たな……」

ようやく現状を理解したらしく、アレスを状態を見たヴィータが顔を青ざめた。

「ね、ねえ……とりあえず機動六課に運ぼうよ。早くしないと……その人、本当に死んじゃうよ？
なんか血吐いてるし……」

フェイトの言葉に、全員が彼に視線を向ける。

「「「!?」」」

彼女の言う通り、彼は本当に血を吐き出していて、身体が軽く痙攣していた。

本当に危険なアレスの状態に四人が慌て始める。

そしてそれをキツカケに、シグナムが慌ててアレスを担ぎ、大急ぎでなのはたちは“機動六課”と呼ばれる場所へと向かって行ったのだった。

第四話 機動六課（前書き）

ここから本編がスタートです

拙い文章ですが、これから長い目で見てやってください

第四話 機動六課

アレスが“機動六課”という場所になのは達に連れられ、集中治療室という部屋に運ばれてから、二時間が経った。

治療の結果、どうにか一命を取り留めたアレスだったが、彼はそれからずっと医務室のベッドで眠ったままだった。

しかしながら、あれほどの怪我が僅か全治一週間で治るというのは、治療した者の腕とアレスの回復力あってのお陰だと言えるだろう。

そして現在、それから三日が経ち、アレスと会ったのは達四人は、とある人物に部隊長室という部屋に呼ばれていた。

そこでのなのは達を仁王立ちで待っていたのは、茶色の制服に身を包み、ショートカットの左側にヘアピンを付けた可愛い風貌の女性だった。

そして四人が入るなり、彼女に向かい合うようにある人物が、すぐに正座をさせられた。

「ヴィータァー！！」

目を吊り上げて、怒りの声で仁王立ちの女がヴィータを呼んだ。呼ばれたヴィータはビクツと肩を震わせて、頭を下げて俯いていた。

「ごめんなさい……はやて」

ヴィータがポツリと呟く。

そこには前にアレスを殴った時の気迫など一切なく、ただの叱られている子供同然だった。

しかし“はやて”と呼ばれた彼女は、謝るヴィータを許す様子は全くなかった。

「……」

そんな殺伐とした光景を部屋の入口でなのは、フェイト、シグナムという順番で綺麗に整列して見ていた。

勿論、彼女たちもはやてを止める気などなく、もとい止められない為、ヴィータが怒られているのを眺めていた。

そんななか、なのはとフェイトは誰にも聞かれることのない“念話”で話していた。

「今はぐっすり眠っているよ。シャルがあと数日で目が醒めるだろうって」

「良かった。あれを見てからなんか心配しちゃって……」

あれと言うのは、ヴィータがアレスを吹き飛ばした時のことである。

「うん……実際、アレス君の回復力は凄いと思うよ。普通なら死んじゃうよ」

なのはが苦笑する。

アレスの怪我がたった一週間で回復するのは、彼女にとって不思議としか言えなかった。

「これもシャルのお陰だね。あとでお礼言っておこうかな」

「だよ。でもまあ……それよりも先に彼に謝らないといけない人がいるけどね……」

なのは視線だけをヴィータに向ける。

「……うん」

フェイトもヴィータに視線を向けた。

そこではやてに一方的に怒られ続けるヴィータが、涙目でひたすら“ごめんなさい”と謝っている。

はやての説教はしばらく終わる様子はない。今回の件で、よっぽどストレスが溜まっていたらしい。

なのは達は、そんな二人を気長に待つことにした。

「……反省したん？」

ようやく怒りが収まったはやてがヴィータに優しく話す。
だが仁王立ちは変わらず、はやては正座のヴィータを見下ろしていた。

「うん……ごめんなさい」

心から反省しているようでヴィータが俯き、吐き出すように呟いた。

それにはやては正座しているヴィータへ、視線を合わせるようにしゃがむと彼女の頭を優しく撫で始めた。

「反省してるならえんよ。でも……うちに謝る前に他に謝る人がいると思うんやけど？」

「……わかつてる」

もう殆ど泣いてる状態のヴィータは、それだけ言っただけ泣くのを我慢した。

「ならええんよ」

はやては、ヴィータを抱きしめて慰めるように頭を撫でた。
それからヴィータが収まるまで、しばらくはやては撫で続けていた。

「「「……………」」」

そんな姿を見て、三人は同じことを考えていた。

ああ、こうやって親は子を叱るのだろっとな…………と。

そして、はやてを怒らせてはいけないな…………と。

「さて……ヴィータが落ち着いたことやし、本題に入るか？」

はやてが部隊長室の奥にある部隊長席に座る。

それに気を取り直し、なのはたち四人が部隊長席の前に綺麗に整列する。

はやてはそれを確認すると、皆が見えるように大きなモニターを展開し、操作してある資料を出した。

その資料の写真には、白い宝石と赤い宝石が写っていた。

「この二個の丸い玉がなのはちゃんたちが回収してきたロストロギアや。まあ、これの用途はさっぱりわからへん」

苦い顔をしたはやてが、なのはに視線を向けた。

「なのはちゃんたちが連れてきた彼……アレス君ちゅうのは、これのことを『コア』って言ったんやな？」

「そうだね。ヴィータちゃんとなんでロストロギアを持っているのか聞いたら、アレス君はそれのことをそう言ったんだよ」

「私の時もそう言っていたよ」

なのはとフェイトの話聞いたはやてが、じつと写真のコアを凝視した。

「見た目は、ただの綺麗な宝石にしか見えへん。
でも彼は何故かこれを集めているみたいやし……」

「なにか特別な使い方があるのかもしれないよ？」

フェイトがそう言うと、はやては頷いた。

「やっぱりそうやな、うちもそう思う。」

あとそれに……彼と何か関係がある組織があるってフェイトちゃん言ってなかった？」

フェイトはあの時のアレスの言葉を思い出しながら、はやてに報告した。

「私も詳しくは知らないんだけど……私がロストロギアを渡して欲しいって言った後に、彼が言ったんだよ。」

『お前は騎士団か？』って」

その言葉にはやては、首を傾げた。

「……騎士団？ 騎士団ってあの騎士？」

はやてがシグナムとヴィータの二人を見る。なのはとフェイトも彼女達へ視線を送った。

「いや……騎士団と言っても決して“ベルカの騎士”って意味ではないかと思いますが……」

シグナムが顔を強張らせ、困った表情を作る。

なのはたちの常識では、彼女らが使う力『魔法』にはふたつの種類がある。

大きく分けて『ミットチルダ式』と『ベルカ式』のふたつ。

そしてベルカ式というのから更に『古代ベルカ式』『近代ベルカ式』があり、計三種類に分けられている。

これにおいて、ベルカ式を使う人の総称を『騎士』と言う。

「そやな。騎士と言ってもシグナムみたいな騎士とは違つかもしれんしな」

ちなみにこの部屋にいるベルカの騎士はシグナム、ヴィータ、はやてである。

「詳しい話はやっぱりアレス君が起きるのを待つしかないか」

そう言つて、はやては展開していたモニターを閉じた。

「そうだね。彼の様子は私とフェイトちゃんで見に行くから起きたら知らせるよ」

「お願いな。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「わかったよ。はやて」

返事をしたフェイトが腕に付いた時計を見る。彼女の時計は午前九時を指していた。

「なのは？ そろそろフォアードメンバーの訓練に戻った方がいいんじゃない？」

時間を見たフェイトがなのはに伝える。

それを聞いたなのはが時計を見ると、彼女は慌て始めた。

「えっ！？ もうこんな時間！？」

うん、じゃあ行ってくるよ。ヴィータちゃん行くよ！」

なのはがヴィータの腕を掴んで早足で始める。
ヴィータはそれに少し驚いたような表情を見ると、

「ちょっとなのは、引つ張るなよ」

そう言いながらなのはに連れられ、部屋から出て行ってしまった。

その後、フェイトは管理局本部に用事がある、と言って出て行き、
シグナムも用事があるらしく彼女に付いて行った。

「はあ」

そうして一人だけとなった部屋で、はやてが椅子に背中を預け、
溜息混じりに天井を仰ぎ見た。

「J、S事件も終わって特に大きい事件がないまま、機動六課が解散まで一ヶ月となったんやがなあ……」

はやてがモニターを出して先程の資料を見て、呟いた。

「ほんとに……厄介なことになりそうや……」

第五話 目覚める青年（前書き）

気長に読んでやってください

良かったら感想とかくれたら嬉しいです

文章などについても思ったことがあったらどっぞ言ってくたさって
オッケーですので

第五話 目覚める青年

「うつ……」

寝ていたアレスが、重い瞼をゆっくり開ける。

しかし意識がはつきりしないのか、彼の視界はぼんやりと曇っている感覚があった。

そのなか、寝ていた身体を彼は起こそうとしたのだが――

「痛ッ……!!」

手を動かした瞬間、彼が顔をしかめた。

少し手足を動かすだけで、身体全体に激しい激痛が走り抜ける。

どこが痛いかさえわからないほど、身体全体が悲鳴をあげていた。

「ッ……!!」

そして息をするたびに、胸が焼けるように熱くなる。

だがそのお陰か、ぼんやりとした視界がはつきりしてくると、最初に見えたのは白い天井だった。

「ん？ 此処はどこだ……？」

寝たままのアレスが首を動かして周りを見渡す。

最初に見た天井と同じく、白で統一されている清楚な部屋。鼻には、馴れない医薬品独特の匂い。

察するに此処は、どこか医務室なのだとアレスは思った。

「……？」

アレスが再度部屋を見渡して、小首を傾げた。

一体、何故自分はこんなところで寝ているのだろうか？と。

彼の一番最後の記憶は、ハンマーを持った赤い子供の姿だった。

「あのちびっこ……」

ヴィータに殴られたことを思い出したアレスが身体を起き上げらせる。

だが、動かすだけで痛いはずの身体はアレスに痛みを与え、彼は顔を歪ませた。

ヴィータに殴られた後、ということは此処は彼女たちの本拠地で

あるに違いない。

「なら……こんな所に居ても意味なんてない」

知らない場所にいる理由がわかり、アレスはベットから抜け出して外に行こうとする。

しかし、アレスがベットから抜け出すと彼は自分の衣服が違うことに気づいた。

彼の今の格好は身体中に包帯が巻かれ、白い服を着ていた。

「ッ!？」

その瞬間、アレスは急いで周りに自分の衣服がないか探し始めた。

彼の服の中には“コア”が入れてあった。

だが、彼が探してもそれはどこにも見当たらなかった。

自分の手元になければ、彼女達が持っているとは思えないかった。

「あいつ等か……」

アレスはなのは達を思い浮かべた。

「取り返さないと……」

常に激痛が走る身体を引きずりながら、アレスが医務室から出る。

部屋を出れば左右、正面と三つに道が分かれていた。

アレスは勘で正面の道を選んで進んで行った。

だがしかし、まだ数メートルしか歩いていないのにアレスは壁に身体を預けていた。

自然に荒い息遣いになり、額に汗が滲^{にじ}み出す。

この時点で、アレスの身体が完全に回復していない状態なのは、明白だった。

だがそれでも、アレスは無理矢理身体を動かして歩き、最初の角を右に曲がった。

曲がった先には、長い廊下が続いていた。

そんな廊下の先をを見ているだけで、アレスは気が遠くなりそうになった。

「……でかい建物だ」

ぼやいてアレスは壁に身体を預けながら、引きずるようにして歩き始めた。

「ッ……」

だが、少し歩いただけで彼の身体は限界を知らせるようにアレスへ痛みを与え続けた。

一歩動くたびに、意識がなくなる感覚が彼を襲った。

「これは……キツイな」

そう言っただけでまた一歩、彼が足を動かす。

「い……！」

するとアレスはバランスを崩し、そのまま地面へ倒れた。不思議なことに、地面に倒れたことによる痛みは何も感じない。そんなことよりも、身体に走っていた激痛の方が、遥かに痛かったからだ。

「ッ……あ……！」

そうして、アレスは消えそうに遠くなる意識のなか、首を動かして長い廊下の先を見た。

耳には、誰かが走っている音が響く。

彼には、それが誰かなんてわからなかった。彼の目は霧がかかったように霞んでいた。

（もう……駄目だ）

消えゆく意識のなか、アレスはゆっくり瞼を閉じた。

部隊長室から訓練場に行き、昼になって訓練が終わった後、なのはアレスの様子を見に行くことにした。

「アレス君まだ寝てるのかな？ 全治一週間らしいからそろそろ起きていい頃だと思っただけど」

医務室に向かいながら、なのはが呟く。

すると同時に、頭の中でフェイトの声が響き渡った。

フェイトからの念話である。

「なのは、お昼まだ？」

「うん。アレス君の様子を見たあとに行くから先に行つて」

「わかった、じゃあ先に待つてるよ」

フェイトとの念話を終え、ちょうど医務室に着いたなのはが部屋に入った。

「——えっ！？」

しかし目の前の光景に彼女は啞然した。

ベッドで眠っているはずのアレスがいない。

なのははすぐにベットに触れて布団の温かさを確かめた。

「まだ温かい……」

ということとは、遠くに行っていない。

それを確認すると、なのはは大急ぎで医務室を出て行った。

彼女は、まず六課の入口に向かって走り出した。

アレスが部屋にいないということは、彼が六課にいる可能性は低かった。

しかし彼がまだ機動六課内に居る可能性もある。

なのはは早速、フェイトとはやてに念話で連絡をとった。

「フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

慌ただしくなのはが二人に話し掛ける。

「なのは、どうしたの？」

「なのはちゃん、どうしたんや？」

二人から返事が来るとなのはは医務室で見たことを告げた。

「アレス君がベットに居なかったの！」

「えっ！」

「なんやて！？」

アレスが居ないことを聞いた二人が驚き、フェイトはなのはに現状を聞いた。

「どこにいるかわかる？」

「わかんない。でもベットはまだ温かったから遠くには行ってないみたい。」

私は外を見に行くから二人は六課の中を探してくれない？」

「わかった。なのは、気をつけて」

「見つけたらすぐに連絡するんやで！」

「うん！」

それを聞いたなのははすぐに念話を切り、六課の外へ走って行った。

なのはの念話を聞いたフェイトが食堂から廊下に出て、走り出していた。

「どこにいるんだろ……」

なのはの言う通り、アレスはそれほど遠くには行っていないはずだろう。

また一週間で治ると言えど、あの怪我では満足に動くこともできないはずだ。

だから彼女は、まず最初に医務室付近を捜すことにした。

そうして、彼女がしばらく走っていると廊下の真ん中で倒れている人が見えた。

体中が包帯だらけで、白い服を着た男。
フェイトはそれがアレスだとすぐにわかった。

「アレス君!？」

フェイトが倒れていた彼を抱き寄せた。

「……………」

息はしている。気絶して倒れただけのようだ。

だが身体中が汗で濡れており、息も荒い。相当無理をしてこころまで来たらしい。

フェイトはアレスを見つけたことを念話でなのはとはやてに伝え、一緒に医師を連れて来るように手配した。

「早く医務室に連れていかないと！」

アレスを医務室へ連れていく為、彼の腕をフェイトが首に回す。そしてアレスの身体を持ち上げると、彼女の肩にずっしりと彼の体重がのしかかった。

「お……………おもい……………」

予想よりもアレスが重かったことにフェイトが呟く。
だが次の瞬間、彼の体重は嘘の様に軽くなった。

「え……？」

フェイトがそれを不思議に思った途端、彼女はすぐにそれを理解した。

意識を取り戻したアレスがフェイトから離れ、壁を支えして立ち上がっていた。

「大丈夫……だ」

そんなボロボロの身体で“大丈夫”と言われても説得力なんかある訳がない。

「でも！」

フェイトはそれでもアレスに肩を貸そうとするが、彼は手を出し、それを拒んだ。

「大丈夫……立ちくらみをしたただけだ、それより」

深く息をしたアレスがフェイトを睨む。

それは殺気が含まれた敵意の眼差しで、彼は静かに告げた。

「……コアはどこだ？」

告げられた言葉に、フェイトは驚くしかなかった。

自分の身体よりも集めているロストロギアを気にしている。

動くだけで辛いはずなのに。

気絶するほど辛いのに。

一体、何が彼をここまで動かせるのか、フェイトには不思議で堪らなかった。

「大丈夫です。貴方の持ち物は、こちらでしっかり保管しています」

ひとまず彼を安心させ、冷静になってもらうべく、フェイトが事実を伝えた。

しかしアレスは変わらず、フェイトを睨んでいた。

「そんなことはわかっている！　今、コアはどこにあるんだ！」

壁を支えに立っていたアレスがフェイトの肩を強く掴み、怒鳴った。

彼の気迫に圧倒されるフェイトだが、彼女は怯えずにアレスの目を見て、言った。

「……ちゃんとこの場所にあります。ですから今は医務室に戻ってください」

「どの部屋に……ゴホッ……ゴホッ」

フェイトから離れて、アレスが口を抑える。

「ッ！？ 大丈夫！？」

軽く血を吐いていたアレスを見て、フェイトはすぐに彼に駆け寄った。

彼の顔は青ざめていて、足も震えていた。
きつと立っているだけでも辛くて堪らないのだろう。

「俺……のことは……放っておけ……ゴホッ」

咳をしながら、アレスが息を荒くする。

「……………」

フェイトはそんな彼の姿を見ると、まるで昔の自分を見ているような気分になった。

昔——あるロストロギアを集めいた自分の姿を、フェイトが思い出す。

『ジュエルシールド』という名のロストロギアを巡って、高町なのはと闘ったことを。

なのはから自分に向けてくれた言葉を無視し続け、自分の目的だけを見つめていた。

何度もぶつかっても、何度も彼女を傷つけても、彼女はこんな自分に何度も声を掛けてくれて。

そして、何度も名前を呼んでもらった。

何度も、何度も。

あの時のなのはの言葉が、彼女の存在があったから、今の自分がいる。

なら、あのように、なのはに自分が救われたように、今度はこの人を自分が救おう。

——なのはのように

そう、フェイトが決意した。

そうして彼を見て、思ったことを彼女は言った。
敬語も忘れて、彼の考えなど気にせず、

「いい加減にしなさいっ!!」

突然、大きい声を出した彼女にアレスは呆然とした。
黙った彼を見て、フェイトが続けた。

「貴方がなんでロストログアを集めているかは知らないッ！
だけど今は貴方の身体が心配なのッ！
話は後でちゃんと聞くからお願いだからベットに戻って!!」

怒鳴るフェイトをアレスは呆然と見つめる。
言いたいことを言い切ったフェイトは目を吊り上げて、アレスを
睨みつけていた。

長い沈黙。

アレスは強く歯を食いしばった後、ゆっくりと口を開いた。

「……わかった」

フェイトはそれを聞くとゆっくりと、吊り上げた目を元に戻した。

「戻れば、コアのありかを教えてくれるんだな？」

「……教える。約束するよ」

フェイトがアレスの腕を首に回す。彼も先程の態度が嘘のようにフェイトに身体を預けた。

そして、二人はゆっくりと歩きはじめた。

フェイトがアレスの歩調に合わせて、ゆっくりと。

「すまなかった……いきなり怒鳴ったりして」

「えっ？」

唐突のアレスの謝罪に、フェイトが驚く。
そんなことを言われるとは夢にも思っていなかった。

「動揺していたんだ。許してくれ」

顔を下に向け、アレスが暗い顔をする。
そんな落ち込んだ彼を見ていると、フェイトは流石にやり過ぎた
と認めてしまった。

「いいよ。私も同じだし」

フェイトが笑みを作り、彼へ視線を向ける。

「ああ……」

アレスがそれを見ると、彼女からすぐに顔を逸らした。

——良い笑顔だ

アレスは顔が熱くなっていくのを感じた。

「？」

そんな彼をフェイトは不思議そうに眺めた。

「それにしても情けない」

医務室の扉が見えるとアレスが呟いた。

「ん？ 何が？」

どうにか聞き取れた彼の声に、フェイトが聞き返す。
アレスは聞かれたことを気にすることなく答えた。

「女性にこうして身体を預けていることだ。男として情けないな」

溜息混じりにアレスが苦笑する。

それを聞いたフェイトは、つい笑ってしまった。

「仕方ないよ。君も大怪我してるんだし」

「それでもだ。今後いつか会えるかわからないが、今度は俺が君を助けよう。

それに、君みたいな美人は忘れないしな」

近いうち此処からいなくなるという意味を含めたことを、アレスが話す。

だが、フェイトは最後に聞いた彼の言葉に気を取られてしまった。

——君みたいな美人は忘れないしな

「美人なんて……そんなことないよ」

アレスは前を見たまま言葉を返した。

「いや……君は十分美人だと思うぞ？
少なくとも俺は身体を預けて緊張しているんだけどな」

男性に美人と言われ、一緒に居て緊張してると言われたことに、
フェイトは身体が熱くなっていくのを感じた。
アレスには『恥ずかしい』という言葉はないのだろうか？

「あ……ありがとう」

消えそうな声でフェイトが呟き、俯いた。

「ああ」

それから二人は医務室に着くとドアを開け、中に入っていくた。

アレスとフェイトが医務室に入ると、なのはが椅子に座って待っていた。

そして他に二名、アレスの知らない人物が座っていた。

茶色の制服の上に、白衣を着たフェイトとは違う金髪のショートカットの女性。

おっとりとした優しそうな美人さんである。

それに茶髪のショートカットで、左側に髪飾りを付けた可愛らしい女性が一人。

なのはたち三人は部屋に入った二人を見ると椅子から立ち上がり、アレスへと近づいていった。

そして三人がアレスに近づくと一斉に彼を掴み、ベッドへ無理矢理放り投げた。

「おっ!?!」

自由に身体を動かせないアレスが、抵抗することも出来なずにベッドへ倒れ込んだ。

その衝撃で身体に痛みを感じ、アレスが顔を歪めると、

「なんで寝てないんですか？」

倒れた彼の前になのはが腰に手を当て、仁王立っていた。
明らかに目の前にいる彼女は怒っていた。

「怪我をしてるんだから動いちゃ駄目ですよ？」

呆れていた白衣の女性がアレスに布団を掛ける。

本当にフェイトの言う通り、心配をさせていたらしい。
急に何か、罪悪感のようなものがアレスに生まれた。

「……すまない」

怪我のせいでろくに身体が動かせなかった彼が謝罪の言葉を綴った。

彼の謝罪に三人が驚いた表情を作る。謝られるなんて思ってもみなかったようだ。

「もう……心配したんですから」

なのはが溜息を吐き、近くの椅子に腰を下ろす。彼女の息が少し荒い、よほど走り回ったのだろう。

「でも、ちゃんと見つかった良かったな」

椅子に座っていた茶髪の女性が安心したように言った。

「？」

アレスが目をぱちくりさせて彼女を見る。

すると、彼女は思い出したように立ち上がり、すぐ自己紹介を始めた。しっかりと敬礼もして。

「すみません……自己紹介が遅れました。

時空管理局、本局古代遺物管理部。機動六課、部隊長の二等陸佐。八神はやてです」

白衣の女性も同じく敬礼して自己紹介を始めた。

「シャルと言います。この医務室の主任医務官です」

自己紹介する二人を見てアレスも、名前だけは教えておこうと思

った。

「アレス・ラインハートだ」

「よろしくお願いします」

はやてが会釈する。

それを見たアレスがはやてに妙な違和感を抱いた。

さっきの口調と今の敬語に明らかに何か違和感がある。

口調だけ言えば、違うのは当たり前だが。何か無理をしているような気がした。

「無理して敬語を使わなくていいぞ？」

アレスの言葉にははやてが目を見開いて驚く。しかしすぐに察したように顔を緩めた。

「いいんか？ 結構しんどいんよ〜これ」

笑いながら言うはやてを見てアレスは気にせずに言った。

「構わない」

「ところでフェイトちゃん」

アレスとの自己紹介を終えたはやてが、唐突に部屋の入口で立っていたフェイトを呼ぶ。

なのは達とアレスとのやりとりのなか、何故かフェイトは蚊帳の外で一人俯いて立っていた。

そしてはやてがフェイトに近づくと、周りに聞こえないように呟いた。

「フェイトちゃん来た時、顔が真っ赤になってたけど、どうしたん？」

「えっ！？ なっ、なんでもないよ！」

嬉しそうに言うはやてだが、フェイトは気づかれたことに更に赤くした。

「そかそか、ならええんや……………後でちゃんと話し聞かせてもらうで」

「ちょ！」

フェイトからはやてが離れてなのはたちの所へ戻っていく。
言い返すこともできなくなったフェイトは、何も言わずそのまま
ついていった。

「どうかしたの？」

はやてとフェイトを見たのはが不思議がる。

「なんでもないで〜」

はやてがなのはの言葉を適当に流す。心なしか彼女の声は楽しそ
うだった。

「……痛ッ！！」

その時、ちょうどアレスの声が部屋に響いた。
三人が彼を見れば、ちょうどシャマルに包帯を変えられていた。

「ここの傷も開いてる……ほんと全く、無茶するから」

そう言いながらシャルはアレスに消毒液を湿らせたガーゼを傷に押し付けた。

「アアッ——!!」

声にならない叫びをあげたアレスが顔を歪める。
だが、シャルはそれを無視してガーゼで傷を押さえ包帯を巻いた。

「次、右腕ですよ」

「えッ!? もう、終わりじゃ……」

シャルの言葉にアレスが後ずさる。

そんなを見たシャルは微笑んで、後ずさる彼の右腕を掴んだ。

「ッ——!!」

同時にアレスの顔が歪む。

もはや怪我人に対する扱いではないことに、アレスが戦慄した。

「安静にしていけないといけないのに勝手に抜け出して……怒ってるんですからね」

笑顔のままシャルが言うが、アレスを掴んでいる手には力が込められていて怒っているのはすぐにわかった。

「反省している。だからもう……」

「まだまだ終わりませんよ」

「」「うわぁ……………」

一部始終を見たはやてたちがアレスに背を向ける。

「シャルを怒らすとこわいんやな」

「」「……うん」

そして悲痛な叫びをあげて痛がるアレスを置いて、三人は医務室

から颯爽と出て行った。

第六話 マテリアルコアと騎士団（前書き）

駄文な作品ですが、どうか気長に見てやってください

感想などもくれたら嬉しいです

第六話 マテリアルコアと騎士団

——四日後

あれからアレスは安静にして治療に専念し、ほぼ万全と言えるぐらいにまで回復した。

それから現在、アレスはなのは達の着ていた茶色の制服の“男性用”を着て部隊長室の前に佇んでいた。

怪我から一週間経った朝にシャマルからはやてが“部隊長室に来るように”と伝えられて今に至る。

「堅苦しいな……これ」

着ている茶色の制服を見ながらアレスはひとりばやく。

それは医務室を出るときに、シャマルに着るように渡される時のこと——

『なあ……俺の着てた服はどこにやったんだ？』

茶色の制服を持ったアレスがシャマルに問う。

彼としては元々着てた服を着たかったのだが、それをシャマルはそれを聞くと、どこからか“布”を持ってきたのだ。

『ん？ それは何だ？』

アレスが聞くと、シャマルはこう告げられたのだった。

『これ……貴方の服なのよ』

『……マジかよ』

それからシャマル曰く――

アレスの着ていた服はヴィータに殴られた件により、ボロボロになって着れなくなっただけらしい。

なので着替えがなかったアレスは、仕方なく茶色の制服を着るしかなかったのだった。

「まあ……入るか」

残念がっても服は返ってこないの、とりあえず彼は目の先にあ

るドアをノックした。

『入ってええで』

すると、はやての声が聞こえたのを確認して、アレスは部隊長室に入った。

「ようこそ機動六課、部隊長室へ！」

はやての声を聞いて入ると奥の椅子にはやてが座っていた。彼女の横には、ヴィータ、シグナム、なのは、フェイトが並んでいる。

「すまん、急に呼び出してもうて」

「気にしてない。俺も聞きたい事があったからな」

「なら……うちから先で良いか？」

「ああ」

アレスが頷くと、はやてが急に椅子から立ち上がった。そして彼を見ながら神妙な顔をし、意を決した様に頷くと、

「今回は……ほんまにうちのヴィータがすまなかった」

彼女が、深く頭を下げた。

「……すいません」

同時に、はやての隣にいたヴィータも頭を下げた。
その二人の奇妙な行動に、アレスが目を細めた。

「いきなりどうした？」

はやてが頭を上げる。

ヴィータも顔を上げると若干表情が暗かった。

「アレス君に、ちゃんと謝っておきたくてな」

それを聞いたアレスが肩を竦すくませた。

「もう過ぎたことだから気にしてない。
もうそれは良いとして、俺に聞きたい事があるんじゃないのか？」

アレスの言葉に不意を突かれ、はやては啞然としてしまう。
だがしかし、何か悟ったようにはやてが頷くと、

「ありがとな」

そう言つて、彼女は部隊長席に座り込んだ。

はやては座るとすぐに真剣な表情になり、アレスへ話を切り出した。

「急で悪いんやけど……私たちが聞きたいことは、アレス君が『コア』と呼んでるロストロギアのこと。

『騎士団』と呼ばれるグループのこと。

そして最後に、アレス君がロストロギアを集めている理由の三つや」

『コア』というロストロギアに関しての情報が少ないはやて達には、アレスの情報がどうしても欲しかった。

更に騎士団と言う名称の組織は、新手のテログループかもしれない。
い。

最後の質問は、はやての私的なモノだった。

異論のないフェイト達は同意して頷いていた。

「それを話せば、俺を解放してコアを含めた持ち物を全部返してく

れるか？」

アレスの言葉に、はやてが顔を曇らせた。

彼の持っているロストロギアは厳重に保管しているが、おいそれと渡す訳にもいかない物であった。

「それはアレス君の話を聞いてからやな」

「……………」

はやての答えを聞いたアレスが考え始める。

彼女たちに、情報を与えて良いものかと。

もしかすれば、はやてはコアを渡さないかもしれない。

一応、フェイトと約束はしたから絶対に安心、と言う訳にもいかないだろう。

どちらにせよコアがはやて側にある為、こちらが後手になってしまう。

故に、アレスの選択肢は限られていた。

「わかった。俺の知っている限りを教えよう」

「ありがとな、じゃあ最初はコアのことからや」

アレスの返事に、はやてはホッと小さく胸を撫で下ろした。

「最初に言っておくが『コア』っていうのは正確に言つと略称で、正式名称は違うんだ。

正式名称は『創造の原石』……別名は『マテリアルコア』って呼ばれてる」

黙って聞いている五人を見て、続けてアレスが話す。

「マテリアルコアは全部で十二個あり、その全てを集めれば何かが起きるらしい」

「何か……ってなんなの？」

そこに疑問に思ったのはアレスに聞く。

「詳しいことはわからないんだよ。それと、集めている理由と騎士団について一緒に説明するが良いか？」

「大丈夫やで」

はやてを含めた全員がアレスの話を聞き漏らさないように集中し

て耳を傾ける。

アレスは、淡々と語りはじめた。

「『騎士団』と言うのは、

“正義を行う”組織の名前だ。

やることは世界各地の犯罪者や汚職政治家の暗殺など、幅広いことやってる。

俺が創造の原石『マテリアルコア』を集めているのは奴らがそれを集めているからだ」

騎士団のことを聞いた五人全員が言葉を失った。

長い間、時空管理局に働いているがそんな集団は聞いたことが無かった。

「なるほど……騎士団についての特徴は知ってるか？」

騎士団について詳しい情報をはやてはアレスから聞くため質問を続けた。

「ただの下っ端なら完全に鎧を着けた兵士みたいな姿をしているな」

「それってもしかして……」

呟いたフェイトをはやては見逃さなかった。

「フェイトちゃん、何か知ってるん？」

「うん。これなんだけど」

フェイトはそう言うと、モニターを出して画像をいくつか表示した。

彼女のモニター画像には、鎧で身体すべてを武装した二人の兵士が、管理局の人間数人と戦っている場面のものであった。

「かなり前の記録なんだけど、管理局を引退したある上官が襲われた時に駆け付けた局員に記録されたものの画像だよ。戦った二人はすぐに逃げて追跡できなかったらしいの。妙に変わった事件だから覚えてたんだけど……」

「それだ」

モニター画像を見たアレスが即答した。

「奴らは痕跡を残さないようにやるんだが、今回は失敗したみたいだな」

「なんで暗殺なんてするんだ」

シグナムが不思議そうに画像を見つめる。

理由が無いのに“殺す”というのは彼女には理解ができなかった。

「簡単な話だ。法律で裁けないから罰を与えたってところだろう」

そう答えたアレスに、フェイトが付け加えるように話した。

「調べるとこの上官って横領とか色々な犯罪をやってたみたいなんだよ」

画像を見たのはが思ったことを口にした。

「罪には罰を……ってことなのかな？」

「なんか気に入くわへんな」

機嫌を悪くしたはやてが腕を組んで呟く。

「これが騎士団のやり方だ。そいつらが集めているコアも何かと利用価値があるかもしれないからな」

「でも、なんでアレス君が集めているの？」

気になったフェイトがアレスに聞いた。

一通り話を聞く限り、彼は全くの部外者ではないか。

「騎士団が集めているからだ。詳しいことは言いたくない」

秘密を作ったアレスに、はやてが不信感を抱く。

たが、誰にでも知られたくないことはある。

彼の詳しい理由については今は追求せずに、話を進めることをはやては優先した。

「貴重な情報ありがとな。で、アレス君も何かあるんやなかったか？」

フェイトが展開していたモニターを閉じると、緊迫した空気が少し和らいでいった。

「俺が言いたいのは持ち物を返して、ここから解放して欲しいだけだ」

「ここ出てからどないするん」

「またコア探しさ」

そう言った途端、はやては良い事を思いついたらしく、勢いよく立ち上がった。

「そんならアレス君！ 機動六課に来ないか？」

「「「「「はあ？」「」「」」」」」

その提案に、はやて以外が声を揃えた。

はやての申し出に、アレスは右手でこめかみを押さえていた。

コイツは何を言っているのだろうか、と思わずにはいらなかった。

見ず知らずの他人を仲間に加えようとしているのだから当然である。

「聞き間違いでありたい……なんて言った？」

確認のためにアレスがもう一度聞き直そうと試みた。

「だからここ出てコア探するより、うちらと一緒に居て探した方が良いやろ？」

答えは変わらないことにアレスは偏頭痛がしそうになる。

「見ず知らずの男をよく仲間に入れようとするな……」

呆れたアレスがはやてを凝視する。

しかし、彼女の目は真剣そのものだった。

「正直、この件はもしかしたら大きい事件になるかもしれんからな。即戦力が欲しいんや、聞けばシグナムと張り合えるぐらいの実力と聞くし、申し分無しや」

「裏切るかもしれないぞ？」

動揺させる為に、アレスが言葉を選んで話す。

こんな反応をする彼が一体仲間という存在にどのような思い入れがあるのかはわからない。

「ええで、信頼するよ」

だが曇りの無い目で、はやてはしっかりとアレスをことを見つめた。

（ああ……なるほど）

しばらくアレスがはやてと目を合わせていると、彼はあることに気づいた。

この女には融通は効かない。
自分が思う事をしっかりと貫く彼女に、アレスは心から呆れ返った。

だが反対に、興味が沸いた。
面白い女だと思った。

ならほんの少しの時間だけ彼女達に付き合うのも悪くない、とアレスは思った。

だがしかし、このまま従うのも何か悔しかったので、アレスは悪あがきをすることにした。

「そこまで言うなら……俺に勝てたら、あんた達の仲間になる」

アレスの答えに、はやて以外が目を見開いた。

「……ええんやな？」

「ああ、勝てたらな？」

はやての真剣な眼差しに、アレスも同じく見つめ返す。

そうして、二人は微笑んだ。

お互いの思うことは違うが自然と笑いが込み上げてきた。

片方は、信頼と不信の矛盾。

片方は、興味と関心。

「なら一時間後に早速模擬戦や。なのはちゃん、アレス君に武器を見繕ってあげてな」

はやてがなのはに頼むと彼女は溜息混じりに言った。

「はやてちゃんがそこまで言うなら……わかったよ。じゃあアレス君ついてきて」

「わかった」

なのはに連れられてアレスが部隊長室から出ていく。
アレスが居なくなっただのをきっかけにヴィータがぼやいた。

「やっぱ何か隠してるな……あいつ」

「いいのですか？　主はやて、アレスを六課に誘って？　疑っているのでは？」

シグナムがはやての考えを察して言う。

重要なことは大体わかった。だが、アレス自身の事は全くわからなかった。

シグナムの質問に、はやては考えたように唸った。

「疑っていないと言えば嘘になるから……近くに置いておきたいってのはある。

でも、信頼したい気持ちもあるから保護や拘束じゃなく……ちやんと“仲間”としてうちは彼を迎え入れたい」

心に思ったことを、はやてが話し出す。

以前に医務室でアレスを見た時、はやては彼を悪い人とは思えなかったからだ。

微かに感じ取った彼の第一印象は――

優しい人。

常に冷たい態度を取るが、きっとそういう類の人間なのだろう。
それに、フェイトのあの態度を見てもそうだった。

（あんなフェイトちゃんを見るのは久しぶりや）

きっとアレスが何か言ったのだろう。はやてはフェイトから聞けるのが楽しみになる。

そのことが嘘であってほしくない。

だからはやては、自分から信頼を向けることにした。

「私は主がそついうなら何も言いません。私個人も、彼を悪くは見れないので」

「同じく」

シグナムの意見にヴィータも同じだった。

「私もアレス君が六課の仲間になってくれた方が、良いかな」

フェイトの言葉にはやては清々しい笑顔を作った。

「なんでかな〜フェイトちゃん？」

「えっ？ 仲間なら心強いと思って」

「そんだけかないな？」

椅子から立つとはやては手の指をうねうねと動かしながら近づいた。

「う……うん」

フェイトが後ずさる。

目の前にいるはやてが異様なまでに怖かった。

「本当はどうなんや〜！」

そう言っではやてがフェイトに突撃した。

「ちょっ！ はやて！？ やめて〜！！？」

その後、部隊長室にフェイトの悲鳴が響き渡った。

第七話 デバイス（前書き）

駄文な作品ですが、どうか気長に見てやってください

感想などもくれたら嬉しいです

第七話 デバイス

模擬戦。もとい戦闘をするのにあたって、第一に必要なのは“武器”である。

だがしかし、アレスにはその“武器”が無かった。以前のシグナム戦により、彼の武器は壊れていたからだ。

そこではやては、なのはに彼の“武器”を見繕うことを頼まれたのだが――

「はあ……」

廊下を歩いているなのはが軽く溜息を吐く。
彼女の後ろには、アレスが黙ってついて来ていた。

（はやてちゃんも大胆なことするよ）

心の中でなのはが呟く。

はやてがアレスを仲間に誘うと言った時は、流石になのはも驚いた。

何も相談せずに言い出したのだから驚くのも当然である。

実際、なのは自身もはやてと同じく、アレスに対して疑問を抱いていた。

彼の説明を聞く限り、マテリアルコアや騎士団については大体なことはわかった。

しかしアレス自身のことは全くと言っていいほど、わからなかった。

そしてそれに、アレスは何かを隠しているのは確かだった。

自分のことを話そうとしなかった点もそうであるが、彼女にはもうひとつ、彼を疑いたくなる理由があった。

それは四日前に、医務室からアレスを探すために出て行った後に、フェイトから彼を見つけた時の話を聞いたことだった。

ただ騎士団が集めているだけなら、普通ならそこまで執着する理由はないはずだ。

だから多分、きっと何か理由があるに違いない。

とても大切に、成し遂げないといけない理由が……。

それはなのはに、小さい頃に会ったフェイトの姿を連想させた。

フェイトも、母の為にロストロギアに強い執着が、過去にあった。

アレスのように、自分のことを放っておくほどの。

傷付いても、どんなに酷い思いをしても、ひたすら彼女は母の為に頑張っていた。

それは当時九歳というあの小さな背中に、どれほど重かったことだろうか。

彼女は、ただ欲しかったただだったのに。

ほんの小さな幸せを。

母と一緒に居たい、そう思っていただけなのに。

そんな、本当にありふれた小さな幸福を求めた彼女の姿を、なのは今でも鮮明に思い出せた。

だからなのは、アレスにも何か理由があるのだろうと思った。

彼が秘密にしているなら、きっといつか、一緒にいれば話してく

れる日が来るのかもしれない。

もしそれまでに、彼が自分達に害を成すことになるなら、自分が止めれば良いだけのこと。

はやてが信じると言っなら、自分も同じく信じる。

彼を信じたい気持ちは、自分だって同じなのだから。

なら仲間になってもらうためにも、ちゃんとした武器をアレスに渡してしっかりと戦ってもらわなければならない。

アレスが仲間になるには、彼が負けなければいけないのだが、そこはきつと大丈夫だろう。

何故か、そう思えた。

「この部屋だよ」

だから、なのはは目の先にある模擬戦について考えることにしたのだった。

なのはに誘導されるまま、アレスは目的の部屋に入る。

その部屋の中は機械が沢山あり、壁にはモニターが幾つも並んであった。

「……うん」

すると、部屋の奥に眼鏡を掛けている長い髪の女性が、モニターに向かって唸っていた。

「シャーリー」

なのはが“シャーリー”と呼んだ女性が、彼女を見て作業を中断した。

「なのはさん？ どうしたんですか？」

そして彼女がなのはに近づくと、次に隣にいるアレスへ視線を向けた。

「……そちらの方は？」

シャーリーが首を傾げるとなのはが紹介した。

「この人はアレス・ラインハート君。

ちよつと色々あつて彼が模擬戦をするんだけど……武器が無くて、何か手頃なデバイスがあると良いんだけど……」

そう聞くとシャーリーは納得したように頷いた。

アレスが医務室に居たことは一応聞いていたようだ。

「貴方がアレスさんですか？

初めまして、私はシャリオ・フィニーノって言います。シャーリーって呼んでください」

「アレス・ラインハートだ。よろしく頼む」

目の前にいるシャーリーを見てみると落ち着くな、とアレスが思う。

気を張る雰囲気を作られせない、独特な雰囲気を漂わせている。そうアレスが考えていると、シャーリーが不思議そうに彼を見ていた。

「でもなんでアレスさんが模擬戦するんですか？」

シャーリーの言い分もわからなくなかった。
脈絡無しにいきなり模擬戦をずっとしているのだ。

「はやて部隊長がアレス君を六課に入れようとしてね。それで模擬戦をしてアレス君が負けたら良いよって話になったの」

なのはが模擬戦をするにあたっての経緯を話す。

「そうなんですか？」

でも今あるデバイスって大量生産モデルじゃないですよ？」

「武器ならなんでも良いさ。贅沢言うなら刀があれば良い」

部屋に興味が出てきたアレスが辺りを見渡す。

「だって、シャーリー」

そんな彼の姿に、なのはが微笑みつつシャーリーへ視線を送った。

「なら良いんですが……刀ですね？」

シャーリーは奥に行くと何かを取り出して戻って来た。

「これなら大丈夫じゃないですか？」

そうして、彼女が手に持っていたのはトランプぐらいの大きさのカードだった。

「俺は“武器”が欲しいんだが……」

アレスがシャーリーの持っているカードを見て、呟く。
これはどう見ても武器ではない。ましてや刀でもなかった。

「？」

彼の反応にシャーリーが不思議がっていると、なのはがあることを思い出した。

「ああ！ アレス君、デバイス知らないんだっけ？」

「……デバイスを知らないんですか？」

それを聞いたシャーリーが目点を点にする。
やはりフェイト達と同じく知らないのが変だ、という顔だった。

「……デバイス？」

アレスがシャーリーの持っているカードを睨むように見つめた。

「『デバイス』って言うのは魔法を使う時の補助などに使う機械のことを言うの。」

私の持つてる『レイジングハート』。ヴィータちゃんの『グライフアイゼン』とかがそうだよ」

そしてなのはに続けて、シャーリーが更に補足説明をした。

「また、デバイスには色々種類があります。」

まずはミットチルダ式とベルカ式です。

ミットチルダ式では、人工知能AIを搭載している『インテリジエントデバイス』、搭載していない『ストレージデバイス』のふたつに分かれます。

なのはさんのレイジングハートさんのような『インテリジエントデバイス』にある人工知能は、使用者に機能や判断を素早くしてもらう手伝いをしてもらうんですね。

でも使用者が未熟だとそれに使用者が振り回されたりしてしまう為、戦闘に慣れた人じゃないと上手く扱えないです。

なので一般的には、この『ストレージデバイス』が数多く出回っているんです」

シャーリーが持っていたカードをアレスに渡す。

「今渡したこれはベルカ式のデバイスで『アームドデバイス』と呼ばれる物です。

様々な形状の中で武器の形状が多い物です。これもAIを搭載している型としていない型もあります。

ちなみに、今渡したこれは搭載していませんよ」

シャーリーは満足げに話終えた。

「まだそれ以外にも何種類があるんだけど、それはまた今度にして……
試しに『セットアップ』って言うてみて」

じつとアレスが手に持っているカードを不思議そうに眺める。
なのはに説明を受けたアレスは、言われるままに実行した。

「……セットアップ」

彼がそう言うのとカードから効果音が聞こえ、光を放ち、カードから形を変えた。

次に現れたのは、手にしっくり来る重さの刀だった。

「おお……」

カードから刀が出てきたことに、アレスは驚きを隠せずに声を漏らす。

ちゃんと鞘もあるが、それはアレスが以前持っていたものとは違い、何かと機械じみた不思議な形の刀だった。

「なんだ？ この格好？」

更に驚くは、アレスの姿が変わっていた事だった。

茶色の制服姿ではなく、動きやすい黒いズボンに白いＴシャツになっていた。

「バリアジャケットの設定はまだしてないので、初期設定のままになっていますよ」

またわからない単語を聞いたアレスが二人に聞き返した。

「バリアジャケット？」

「バリアジャケットってのは、魔力で作った強化服で、魔法の攻撃や環境の温度変化から守ってくれるんだよ」

手早くなのはが説明する。

「ていうかなのはさん、バリアジャケットが出てきたってことは……アレスさんには魔力あるんじゃない？……？」

“魔力で作る”ということは作った人物は魔力を保有していることになる。

「それも驚きだよね……アレス君には魔導士の才能があるかもしれないよ」

バリアジャケットを見て二人が納得しているだが、アレスは彼女達から受けた説明を整理するので精一杯であった。

整理しながらアレスが考えていると、一番気になったことがあった。

「さっきから気になったんだが“魔法”ってなんだ？」

頭で整理して、不可解なことに彼が質問した。

「ああ、そういえば説明してなかったね……」

簡単に言うと“魔法”って言うのは、自分の中にある魔力を使っ

て戦う力のこと。

私の魔法弾やフェイトちゃんの鎌、シグナムの炎も魔法ってことになるの。

デバイスはそれを使うための補助アイテムってことだよ」

「なるほど……」

それを聞いたアレスはデバイスの用途をようやく理解した。

それから一通りの重要な事柄の説明を終えて、なのはやシャーリ―に更に詳しいことを聞いた後、アレスたち三人は訓練所に向かっていた。

デバイスや魔法の説明を受けたりして、思ったより時間を使ってしまった。

デバイスを元の形『待機状態』に戻したアレスは、今は制服姿に戻っていた。

「魔法か……本当に不思議だ」

感心しているようにアレスが呟く。

「そうですか？」

そのアレスの言葉を、シャーリーが可笑しく思った。

シャーリーにとって、魔法というモノは常識と言っていていいものだったからだ。

まさかそれを不思議なモノだと言われれば、誰だろうと可笑しく思うに違いない。

「魔力というモノを使う力と言うのがな……俺に魔力があったのも驚きだ」

「仕方ないよ、知らなかったんだし」

前を歩いていたなのは顔だけ振り返る。

「まあ……な。とりあえず今は戦うことに専念しよう」

そう言って手に持っていたカードを見つめ、アレスが軽く握り締

める。

「誰が相手にあるかわからないけど頑張って」

なのはがアレスを心配して話す。

魔法を知らないアレスが、どこまで戦えるかはわからない。

仲間になってもらうなら、彼は負けなければならない。

だがしかし——そうだとしても、なのははただ純粹に彼の闘いを見たいと思った。

第八話 模擬戦（前書き）

駄文な作品ですが、どうか気長に見てやってください

感想などもくれたら嬉しいです

第八話 模擬戦

機動六課から出て、アレス達三人が舗装された道を歩いていく。六課の外は海に面した場所にあるらしく、建物から出るとすぐ目の前には、海が広がっていた。

しばらく歩いていると、海の上に浮かんでいる奇妙な島にアレスの視線が注がれた。

何もない平らな、人の手によって作られた人口の島である。

どうやらそこには陸から一本道で繋がっているらしく、アレス達がそこへ到着すると、すでにはやて達が待っていた。

「おお！ 来たんやな？」

はやてが三人に気づく。

彼女の反応に、他に居た人達もアレス達に気づいた。

「来たが……どこでやれば良いんだ？」

アレスが周りを見渡すが、思い当たる場所はひとつしかなかった。

「もちろんあそこや！」

はやてが平らな島に指をさした。

「何かの訓練施設なのか？」

「そうや。設定すれば街の中や森なんかを立体映像で出せる。もちろん触れるし、ぶつかれば痛いぞ」
も

それを聞いたアレスが、ほおと感嘆の声をあげた。

「これも魔法か……」

「そや、凄いやろ？」

胸を張って誇らしげにはやてが話す。
全くだ、とアレスは頷いた。

「じゃあ早速、今回は街フィールドで戦ってもらおうぞ！」

対戦相手は、この人や！」

はやてが後ろに居る人達に振り向くと、同時にある人物が一步前に出た。

黒い制服に、長い金髪。

それは紛れもなく、フェイトだった。

「もうひとり居るで」

更にはやてがそう言うのと更にもう一人、一步前に出た。

茶色の制服に身を包み、長い髪をひとつに結った女性。
シグナムだった。

それを見た途端、なのはが驚いて、反論した。

「ライトニングの二人が相手をするのッ!？」

なのはの反応にアレスがビクッと驚く。彼女にはそれが驚愕するに値したらしい。

「そうやで？ 彼の实力も見たいし、フォワードメンバーにも見せてあげたいしな」

はやての後ろには、シグナムとフェイトの他にフォワードメンバ
ーと呼ばれる四人がいた。

アレスが四人に視線を向けると、彼の視線に気づいた四人は軽く
会釈を返した。

「それでも二対一って戦力的にちょっとキツイと思うんだけど？」

はやてに反論しているのはだが、それとは別にアレスは面白い
と思っていた。

今だ未知の武器『デバイス』を使つての戦闘。

戦闘相手は“強い”フェイトとシグナムの二人である。

相手が強敵であることが、アレスに火をつけた。

自分がどれぐらいやれるか楽しくなっていた。

「いいだろう。乗ってやるよ」

アレスの言葉になのはが啞然とした。

「えっ！！ ちょっと!？」

二人の実力を知っているのはがアレスを説得し始める。
アレスの言葉を聞いたフォワードメンバー四人も、驚いて彼を凝視していた。

「ティア……あの人、大丈夫なのかな？」

青い髪の女が、髪をふたつに結っている銃を持った人物に話しかけた。

「さあね……あのフェイト隊長とシグナム副隊長が相手だからすぐにやられるんじゃない？」

「大丈夫じゃないですか？ 自信ありそうですし」

赤い短髪の少年が返す。

「私もそう思います」

桃色をしたセミロングの少女も少年に同意した。

「良いのっ！？ アレス君、あの二人は本当に強いんだよ？」

なのはが必死にフェイト達の実力をアレスに伝える。

「強い方が燃えるだろ？」

しかしそれを聞いてもアレスは笑いながら返した。

「ほお……言うやないか？　なら二人で決定や！」

「はやてちゃん！？」

「別にええやないか？」

アレス君がああ言ってるんやし、うちとしては彼が六課に来てくれる確率が上がってラッキーやし」

アレスを見てはやてがニヤつく。

「もう……知らないから」

なのはが拗ねたように呟くとすぐにモニターを展開して、人工島を街に変えるようにモニターを操作した。

するとすぐに島に変化が起こり、平らな島は街へと姿を変えた。

「じゃあよろしくね？」

「よろしく頼むぞ」

「ああ」

二人から挨拶されたアレスは彼女達と一緒に街へ向かって行った。

展開された街フィールドに三人が到着すると、なのはに指定された場所にそれぞれ分かれていった。

その光景をモニターからはやて達が見つめる。

はやてはモニター越しで三人に五分後に試合開始を伝え、軽く息を吐いた。

「さて……どうなるかな？」

「アレス君が負けるに決まってるよ。はやてちゃん」

まだ不満らしいのはが刺々しく言った。

魔法を使えないアレスと自分が認める実力を持った二人が戦うのだ

ゆえになのはには、結果が容易に予想できた。

「わかんないで？ アレス君自信あるみたいやし」

モニターに映るアレスをはやてが見つめる。
なのはも画面の彼をじっと見つめた。

「魔法も使えないのに……ねえ……」

小さく呟いたなのはにティアと呼ばれた女性は「え？」と声を漏らした。

「あの人……魔法、使えないんですか？」

「うん。正確には使ったことがないが正しいんだけどね」

なのはが言うと青髪の女性が不思議そうに首を傾げた。

「なんで魔法も使えないのに、あの方はフェイトさん達と戦った
る……」

彼女がアレスの行動を理解しかねる。少なくとも彼女もフェイト達の実力は充分に理解していた。

「それはやっぱり、それなりに戦う実力があるってことじゃないですか？」

赤髪の少年が続けて話す。

挑むことが出来るならそれに見合うだけの実力、力を持っているはずだ。

「それでもシグナムを倒したらしいから実力はあるみたい」

「「「あのシグナム副隊長を倒したあ？」「」」」

なのはが言ったことにフォワードメンバー四人が声を揃えて驚いた。

“シグナムが負けた”という事実は、四人にとって驚くことだった。

「まぐれじゃないですか？」

ティアと呼ばれた女が言う。

「シグナム副隊長が負けた……」

赤髪の少年が感心の眼差しで画面のアレスを見る。
魔法を使わずに、どうやってアレスはシグナムを倒したのかと少年は考えを膨らました。

「皆さん、そろそろ始まるみたいですよ？」

桃色のセミロングの少女が皆に告げる。

「もしかしたら、かなり勉強になるかもしれんで？」

はやてが言うとフォワードメンバーがそれぞれに違う考えを持ちながら、モニターを見た。

その時、ちょうど五分が経ち、試合開始のブザーが大きく鳴り響いた。

ブザーの音が試合開始の合図と知っていたアレスが早速持っているカードを取り出す。

そして、あの言葉を紡いだ。

「……セットアップ」

デバイスが光り、カードだった物が刀に姿を変える。
アレスの服装も先ほどの制服姿から戦闘服に変わり、刀は腰にし
っかりと装備されていた。

「あの姿と剣ってデバイスですか？」

赤髪の少年がなのはに質問する。

「そうだよ。初めて使うから量産型のやつなんだけど」

「そうなんですか……」

そう呟いた少年はモニターへと再び視線を戻した。

古びたビルが建ち並ぶ大通りに、アレスが一人立ち尽くす。

その姿は、彼がまるで世界に一人だけのように感じられた。

アレスはバリアジャケットを着ると、軽く身体を動かして自分の状態を確認した。

どこを動かしても痛みは感じない。身体はしっかり意思通りに動いてくれた。

「……よし」

体調は万全。これからの戦闘を全力で戦えることに、アレスは心強く感じた。

「刀も確認してある。抜刀を使うには申し分ない」

刀を見て、柄を握りながらアレスが呟く。

「ん？」

そうするとアレスは何かに気づき、前に視線を向けた。柄を握ったまま刀を抜かず、腰を低くして戦闘体制を取る。

「……来たな」

アレスがそう言うのと彼に向かって、遠くから一直線で紫色の光が飛んで来ていた。

——シグナムだ

「はあっ!!」

シグナムは数秒もしないうちにアレスに近づくと、すれ違い様に剣を薙ぎ払った。

「ッ!!」

放たれた剣をアレスが横に跳んで回避する。

シグナムは避けられたとわかると、彼に向かって方向転換し着地した。

「今度はこっちからだ」

シグナムが着地した瞬間、アレスが鞘から刀を抜いて彼女へと駆け出す。

そしてシグナムに近づき、刀を左下から斜め上へと斬り上げた。だがシグナムの剣が、それを防ぎ、弾いた。アレスは弾かれたとわかれると弾かれた勢いを乗せて右へ回転し、左から斬りかかった。

しかし、それをもシグナムは防いだ。

更にアレスが次々と攻撃するが、シグナムはすべて防ぎ続けていた。

「くっ!!」

反撃せずに、シグナムがアレスの攻撃を受け続ける。

正確には、反撃が出来ないというのが正しかった。

アレスの攻撃が、予想よりも遥かに重かった。

ゆえに、シグナムは全力で防御に徹するしかなかった。

防いでいるだけでバランスが崩れそうになるのを、シグナムは必死に耐え続けた。

そうして幾度か刀と剣がぶつかると、二人は押し合うように鍔ぜり合った。

「……やるな」

腕に力を込めて、シグナムが呟く。

アレスはそれを聞くと肩を竦ませて返した。

「早く本気でやらないと怪我するぞ？　まあ二対一だから俺も本気でやるさ」

“本気”と言う言葉にシグナムが反応した。

「……面白いッ！」

シグナムが笑う。

まだ彼が実力を出し切ってないことに、彼女は身体が震えるのを感じた。

「前はあんたの技、見してもらったからな。今度は俺が見せてやるよ」

アレスが不敵に笑う。

そして彼はシグナムの剣を弾き返すと、後ろへ距離をとり刀を鞘に戻した。

腰を低くして構え、刀の柄を握り締め、シグナムを睨む。

「ッ……！？」

その瞬間、シグナムは構えてた剣を再度、反射的に構え直していた。

彼の目を見た途端、背筋が凍る感覚が彼女を襲った。

「連鎖、抜刀……」

そしてアレスが呟く。
後ろに腰を捻り、シグナムを睨んだまま、刀を下から縦に抜き放った。

「——閃光衝斬ッ！！」

声と共に、彼の刀から斬撃が放たれる。
空気を切り裂いて、三日月のような形の風が飛ぶ。
それは地面を削りながら、シグナムへ向かっていった。

「ッ……！！」

風のように速く飛ぶ斬撃をシグナムは受けようとはせずに、避けた。
そしてその選択は、結果的に正しかったとシグナムは思い知らされることになった。

避けた斬撃が、後ろの古いビルに当たる。

瞬間、斬撃の当たったビルはその威力に耐え切れず、粉々に崩れ落ちていた。

もしアレを受けていればどうなっていたか、と考えたシグナムは背筋が震えた。

「まだだっ！！」

アレスは刀を抜き放つと、すぐに右足を軸に身体を回転させながら鞘に刀を戻した。

そこから遠心力を付けてシグナムに振り向くと、彼は戻した刀をもう一度振り抜いた。

更なる斬撃が、再度シグナムに襲い掛かった。

二撃目の斬撃をシグナムが左に避ける。

避けられた閃光衝斬はビルにぶつかり轟音を鳴らす。

シグナムがそれに気を取られている隙に、アレスは彼女に近づいて刀を薙ぎ払った。

「はぁあっ！」

しかしシグナムが剣を盾にして刀を止める。

「くっ！」

アレスの一撃をシグナムが堪えるが、完璧には勢いを抑え切れなかった為、足に踏ん張りを効かせても若干後ろに身体を持っていける。

そこへ更にアレスが跳んで追撃を開始した。

「このッ！！」

体制を立て直したシグナムもアレスに反撃を開始した。

何度も激しく剣と刀がぶつかり合う。

何度も何度も、目の前の敵を斬り伏せる為。

しかし、互いに決定打が入らずに時間だけが過ぎていく。

確実に倒す為に振るっているのに、前の敵が倒れないことを二人は歯痒く感じた。

——やはり、強い

剣士として、シグナムとアレスは、以前会った時の比でない互いの実力を、認めざるを得なかった。

だがそのなか、その光景を空から眺める視線が、ひとつあった。

空から戦っている二人をフェイトが見つめる。

アレスの実力をフェイトは大方予想していたが、シグナムと互角の戦いを見て予想以上だったことに、彼女は心から驚いていた。

「やっぱり強いね……私も本気でやらないと負けちゃうかも……バルディッシュ！」

フェイトが持っていた黒い斧の名を呼ぶ。

それは以前アレスが戦った時のような金色の刃はなく、ただの斧だった。

彼女の声に反応して、バルディッシュの金色の球体が光る。

> Load Cartridge <

バルディツシュの柄の先端にある黒い筒がスライドして硝煙をあげる。

するとフェイトを中心に黄色い魔法陣が現れ、彼女の周りに金色の球体『魔力スフィア』が八つ出現した。

そのスフィアには、ひとつひとつ輪のような環状の魔法陣が囲ってある。

それらが展開されたことを確認すると、フェイトは腕を振りながら魔力スフィアに、発射を命じた。

「プラズマランサー……ファイア！」

フェイトに命じられた八つのスフィアが、環状の魔法陣を発射台に飛び出す。

発射される瞬間、スフィアの形状が変化し、球体から細長くなり形を変えた。

その形は、槍。

金色に、ほのかに稲妻を纏った槍は、まっすぐにアレスへ飛んで行った。

「あれはなんだ……？」

アレスが空から迫り来る八つの雷槍『プラズマランサー』に気づく。

だがしかし、シグナムがいるせいでアレスは回避行動を取れずになっていた。

念話で連絡していたシグナムは、プラズマランサーが当たる寸前までアレスを足止めしようとする。

アレスがシグナムの剣『レヴァンティン』を弾き返そうと力を入れる。

しかしシグナムも必死にそれを阻止した。

かなり速い速度で『プラズマランサー』が二人の頭上にまで迫ってくる。そこでシグナムは後ろに跳び、その場からすぐに離れた。

(やば……)

この時点で、プラズマランサーは彼の回避不可能な距離にまで迫っていた。

避けることは、ほぼ不可能だった。

「ッ!!」

アレスが刀を鞘に戻した。

――避けられない

――なら、避けなければいい

――方法ならある

――飛んできているなら、吹き飛ばせば良い

アレスが柄を握って構え、身体を後ろに捻る。そして力を溜めて刀を抜き放った。

「抜刀式――衝破ッ!!」

刀を振り抜き、アレスが風の壁を作り出した。

吹き荒れる風がプラズマランサーに衝突し、八つ全てが機動を変えて四方へ散って行く。

だが、プラズマランサーが防がれてもフェイトは動じなかった。状況を見つめたまま、彼女は落ち着いた様子で雷槍に命じた。

「ターン！」

彼女の声で八つの槍が全て空中でピタリと止まる。そして全てが回転し、アレスへ再度照準を合わせた。

次の瞬間、八つのプラズマランサーがアレスへと再度降り注いだ。

「戻って来るのかよ……」

まさか戻って来るとは思わなかったアレスが溜息交じりにぼやく。八つのプラズマランサーはまっすぐに、様々な方向からアレスを貫こうとしていた。

「……厄介な代物だ」

アレスが後ろにステップを踏み、プラズマランサーを躲す。
アレスが避けると、先程彼が居た場所にランサーが集まり、ぶつかり合った。

しかしそれらは消えることは無く、また進行方向をアレスに向けて飛び出した。

（これは……！！）

迫り来るプラズマランサーを見据えながら、アレスが奥にいるシグナムに気づいた。

この瞬間、アレスとプラズマランサー、シグナムが道なりに一直線に並んだ。

上や横に避けず、後ろに避けたことが、アレスにチャンスを与えた。

アレスは、すでに鞘に戻してあった刀を抜き放った。

「はああアッ！！」

アレスがプラズマランサーに向け、閃光衝斬を放つ。
そして更に、続けてアレスはそのまま振り切った勢いを殺さずに回転した。

今度は鞘に入れずに彼は閃光衝斬を放った。

「二連ッ！！」

鞘から抜くことで使う技である為、二撃目は一発目より威力がかなり落ちる。

それでも威力は決して弱くはなかった。

二つの刃が、一列に並んで飛んでいく。

一撃目がプラズマランサーに当たる。

運良く、八つ全て破壊。

それにより爆風が生まれて煙が舞う。そこから煙を突き抜けて二発目がシグナムへ襲い掛かった。

「なっ！」

自分に攻撃が来るとは思わず、不意を突かれたシグナムが剣で防御体制になる。

しかし、防御の姿勢をとった瞬間、シグナムはすぐに自分の失態を理解した。

高威力の閃光衝斬を避けずに防御してしまった。

だがすでに遅く、レヴァンティンに閃光衝斬が当たる。

防御をしたおかげで直撃は免れたが、シグナムはあまりの威力に吹き飛ばされた。

シグナムの後ろにはビルがあり、彼女はビルに激突して姿を消した。

「……………」

アレスが少し待つが、シグナムは姿を現さない。
アレスは気絶したのだと解釈した。

「次は……………」

アレスが刀を鞘にしまうと次の目標をフェイトに定めた。

一方、フェイトはアレスが行ったプラズマランサーの破壊、シグナムに攻撃という一連の攻撃に感心し、驚いていた。

「上手いな……………」
「というかシグナム大丈夫かな？」

次は私みたいだけど、アレス君どうやってここまで来るのかな？」

フェイトは魔法によりビルより高い位置に浮遊している。彼女の知る限り、アレスには空を飛ぶ術はないはずだ。

地上にいるアレスが先程の閃光衝斬を放つても、陸と空では距離があるため容易に避けることが出来る。

ゆえにこの差はとても大きいと言える。

どんなに強くても、攻撃が当たらなくては意味がない。

地上にいるアレスは接近戦が得意であるはず。

ならば空にいるフェイトは空中から遠距離攻撃をすれば良いだけだ。

だが、フェイトはその点についてアレスに何か策があると考えた。

アレスが柄を握って構えると抜かず、右足を軸に回転する。

「抜刀四式——」

そしてアレスは鞘から刀を抜かず、鞘に刀を収めたまま、振り向き様に鞘ごと刀を振るった。

「天駆ッ!!」

振り上げた刀をアレスが自分の前でまっすぐ止める。

その勢いで、鞘が刀身から飛び出す。それは回転して飛んで行かず、フェイトに向かって真っ直ぐ飛んで行った。

鞘の速さはフェイトのプラズマランサーと同等。それは速度を緩めることなく飛んでゆく。

フェイトが気づく頃には、鞘との距離は残り僅かだった。

「…………鞘？」

風の刃ではなく鞘が飛んできたことに動揺したが、すぐに彼女は防御を開始した。

「バルディッシュュ!」

> Protection! <

フェイトが手を前に出し、魔法の盾“プロテクション”展開した。

アレスの鞘がフェイトの盾に衝突すると、それは空高く弾かれた。

しかし弾かれた鞘はそのまま飛ぶことなく、ある人の手がそれを掴み取った。

「なっ!？」

フェイトはその人物を見ると声をあげて驚き、思った。

——何故、ここにアレスがそこにいる？

フェイトはアレスが目の前にことが、理解出来なかった。
アレスは、飛べない。そう思っていた人物が目前にいる。
動揺しないわけがない。

そのため、彼女の反応に遅れが生じた。

「はっ!！」

アレスが左手に掴んだ鞘をフェイトに振り下ろす。
フェイトはバルディッシュで鞘を受け止めた。

「くっ!」

「次ッ!！」

鞘を振り下ろした後、アレスが身体を横に捻って回転し、右手の刀を振り下ろした。

だが、それもフェイトがとうにか凌ぐ。

しかし攻撃を終えたアレスは空中で刀を鞘に戻すと、身体を更に捻って、抜き放った。

「閃光衝斬ッ!!」

「ッ……!!」

迫り来る斬撃に、フェイトが即座に危険を察知すると身体を捻って斬撃を躲した。

そしてそこからフェイトが体制を立て直す為、距離を取ろうとするが……

アレスが、そうはさせなかった。

「——翔駆ッ!」

突然、アレスが虚空を踏み付ける。

そうすると、地面を蹴ったようにアレスが勢いよく飛び出した。

「はぁあっ!!」

アレスが刀を突き立ててフェイトへ突進する。
フェイトはすかさずプロテクションを展開して防御体制を取った。
アレスの突き立てた刀が彼女のプロテクションに防がれた。
しかし彼の勢いは止まることなく、フェイトと共に地面へ垂直に
落下した。

「ッ！ バルディッシュュ！！」

フェイトは地面にぶつかる前にプロテクションを解除し、アレス
の突きを身体を捻って回避した。

「はぁあッ！！」

そしてアレスへバルディッシュュを薙ぎ払った。

「！？」

突然の反撃に驚きながらも、アレスが薙ぎ払われたバルディッシュ
ュを受け止めるが、勢いを殺せずに弾き飛ばされた。

その隙にフェイトは低空飛行でアレスから距離を取る。

アレスが少し遅れて着地すると、彼はすぐにフェイトとの距離を
確認する。

距離は、約八メートル。

それを確認すると、アレスは刀を鞘に収めて呟いた。

「なかなか勝たせてくれないものだな」

その呟きはフェイトに聞こえたらしく、フェイトは苦笑しながら答えた。

「簡単にやられるほど、私は甘くないよ」

実のところ少し危なかった、とフェイトは思ったが、あえて口には出さなかった。

「やれると思っただがな」

肩を竦ませてアレスが残念そうにする。

「でも……魔法も使わないであそこまでやれるアレス君は本当に凄
いよ」

アレスのそんな姿を見たフェイトは、本心から思っていたことを言った。

自分の身体と刀だけで、フェイトとジグナムと張り合う戦闘力。魔法を使わないで空を飛ぶことができることが出来るのだ。はつきり言つて、とても人間技ではない。

魔法を使っているなら納得は出来る。しかしアレスは一切使っていないのだ。

フェイトは、そう思うしかなかった。

「そうか？ 俺にはわからないが……」

そこでアレスは何かを思い出したらしく、フェイトにこう言い出した。

「……ところで思ったんだが、その“アレス君”て呼ぶのどうにかしてくれないか？」

戦闘に全く関係ないことをアレスが言い出したことに、フェイトがきょとんとした。

そして戦闘中の言葉とは思えずに、つい笑ってしまった。

「アレス君って言われるの……ヤダ？」

「なんか居心地が悪くてな……楽に呼んでくれないか？」

フェイトが言うとアレスが苦笑気味に返した。

「じゃあ、アレスって呼ぶよ」

「それで良い」

フェイトとしても楽に呼ぶ方が良かったのでそうすることにした。

「さて——じゃあそろそろ、お喋りはやめにするか？」

話がひと区切りしたところで、アレスが刀を握り締め、構える。

フェイトも彼が構えたことを確認し、両手でバルディッシュを持ち、構えると、

「そうだね。早く決着つけないと……バルディッシュ！」

彼女が自分の愛機の名を呼んだ。

> Load Cartridge! <

フェイトの声に応じ、バルディッシュが硝煙をあげる。

> Haken Form! <

続けて、バルディッシュが『ハーケンフォーム』という形に変化した。

斧だったバルディッシュに金色の刃が表れ“大鎌”になり、逆の部分には同じ金色をした三枚の羽に似た刃が付いていた。

「じゃあ……行くよ？」

フェイトが大鎌を肩に担ぎ上げる。

> Sonic Move! <

同時にバルディッシュから何か聞こえた瞬間、彼女がアレスの視界から消えた。

「——ッ!？」

彼女を見失ったことに気づいたアレスがすぐ後ろへ振り返り、鞘から刀を抜き、横一線に払った。

ガギン——とアレスの刀に衝撃が走る。彼の刀には、フェイトのバルディッシュが当たっていた。

「これが、高速移動ってやつか……」

魔法について、なのはとシャリーに説明されたことをアレスが思い出す。

移動魔法。普通の移動とは違う、魔法を使った移動手段の総称。飛行や高速移動の魔法がこれに該当する。

そしてまさに今、フェイトが使用した『ソニックムーブ』がそれだった。

「そうだよ。じゃあ次はどうかね？」

そう言い、またフェイトがアレスの視界から消える。

アレスはまた後ろへ振り向くと、上からフェイトの振り下ろしていたバルディッシュを防いでいた。

「……見えてるみたいだね」

彼の反応の良さに、フェイトが確信する。

まぐれや偶然が続く訳がなく、明らかにアレスは自分を捉えているから、防げたのだ。

「まあな、見えてる」

アレスが苦笑しながら、フェイトのバルデツシュを弾き返した。フェイトの移動魔法『ソニックムーブ』は、一般人が見れば彼女の姿を目視することもできないだろう。

シグナムやなのは程の戦闘の熟練者ならば目で追えないことはない。いい。

だがそれでも、体調や体力によつては追えない攻撃が出てくる。それほど彼女の移動速度は速いのだ。

ゆえに彼女の速さは一流の速さであり、彼女自身も自分の速度を誇りに思っていた。

「じゃあもう少しスピード上げるね」

そう言いながら、また彼の視界からフェイトが消える。

背後からのフェイトの薙ぎ払いをアレスが防ぐ。

だが彼が防御した瞬間に、再度移動していたフェイトが彼へ更に

攻撃を仕掛けていた。

しかしアレスは反応が遅れることなく、刀で防いでいた。

その後、何度も彼女が攻撃するが綺麗に彼は、躲し続ける。

その間、フェイトの姿は見られず、その光景はアレスがひとりで暴れ回っている風にしか見えなかった。

そして最後の一撃で、二人が鏝ぜり合った。

「かなり速度上げてるのにちゃんと追って来れるんだ……」

彼の反応の良さに、フェイトが驚き、感心する。

「あんまり舐めるなよ？」

競り合いながら、アレスはフェイトを軽く睨んだ。

フェイトがバルディッシュを握る手に力を込める。

もう小手調べのようなことをしても無駄だと言っことを理解し、彼女が告げた。

「なら……本気で行くよ！」

「俺もそうさせてもらおう！」

アレスが答え、バルディッシュを弾き、足に力を込める。

そして二人が同時に動き出した瞬間、彼らがその場から消え去った。

「えっ！？ 二人共消えちゃったよ！？」

二人の戦闘をモニターを見ていた青髪の女の子が、二人が消えたことに驚く。

「馬鹿スバル、ちゃんとモニター見なさい！」

その反応に、ティアがスバルと呼ばれた女の子を怒鳴った。

「そつだよ、しっかり見てみたらわかるよ？」

なのはがスバルにそう言つとスバルは目を細めてモニターを凝視した。

「ああ！ 見えた！」

スバルが見たものは二人が激しく飛び回り、斬り合っている姿だった。

斬つた、と思ったらもう違う場所に移動している。次々と場所を変え、二人が縦横無尽に戦っていた。

「凄いですねあの人…… 剣から出る技もそうですし、あの高速移動も」

モニターから目を逸らさずに赤髪の少年は呟いた。

「…… 予想以上やな」

「あれで魔導師じゃないって言うんだから驚きだよね。アレってどう見ても人間技じゃないよ」

しみじみとはやてが呟くとなのはが答える。

「フェイト隊長は、確かソニックムーブで高速移動してるんですよ

ね？」

モニターを見ていたスバルがなのはに質問する。

「そうだよ。特にフェイト隊長のは、かなり熟練されているから速さは一級品だね」

「てことは……アレスさんはそれを生身の身体だけでやってるんですか！？」

赤髪の少年が驚く。

魔法を使わないで、あれほど高速移動は普通出来ない。
もし出来たとしても、身体の方が耐えられるわけがない。

そして武器は違うが近接戦闘をする彼にとって、魔法無しであんな風に立ち回れることが、どれ程のものか理解していた。

「だよね……普通ならあんな高速移動するなんて、身体が耐えられないよ」

なのはがモニターに映っているアレスを見ながら呟いた。
彼女の隣でモニターを見ていたはやてが、ニヤリと笑顔を作った。

「これは結果が楽しみになってきたわ」

アレスとフェイトの目まぐるしい攻防が続いて僅か数分。

だがたったそれだけの短い戦闘時間で、アレスの身体に変化が訪れていた。

「チツ!!」

アレスの下半身が悲鳴を上げる。足に酷い激痛が走る。なのはが言っていた通り、耐えられるわけがないのだ。

アレスが高速移動及び空中移動が出来る『翔駆』は身体にかなりの負担がかかる。

空中にいるフェイトに近づく時に使った技でもある。

しかしアレスは、フェイトにそれを悟られないように、全力で動き続けていた。

「はあ……これで！」

そんな彼の焦りなど知るよしもないフェイトが空高く飛び上がり、アレスから離れる。

そして彼女はバルディッシュを担ぎ、大きく横へと薙ぎ払った。

「ハーケンセイバーッ!!」

バルディッシュの金色の刃が本体から外れ、ブーメランのように飛び出す。

それは回転しながらアレスへハーケンセイバーが向かっていった。アレスが後ろへ跳び回避するが、避けようとしてもハーケンセイバーはアレスいる方へと方向を変え、追尾していた。

「追尾してくるのか？」

それに疑問に思ったが、アレスはハーケンセイバーを壊すことを選択する。刀を鞘に戻し、すかさず抜き放った。

「——ハッ！」

アレスが閃光衝斬を放ち、ハーケンセイバーを相殺した。

アレスがハーケンセイバーに気を取られている隙に、フェイトがアレスに向け、目の前に魔法陣を展開する。

彼女の左手に電気を帯びた金色の球体『魔力スフィア』が現れる。その時、アレスの閃光衝斬がハーケンセイバーを相殺した。

「トライデント……」

フェイトが持つバルディッシュの黒い筒が二回動き、硝煙をあげる。

そして彼女は左手のスフィアを魔法陣に突き出した。

「スマッシュャー……」

彼女の前にある魔法陣からビームが放たれる。

途中でそれは上下に一本ずつ分かれ、計三本のビームがアレスへ襲い掛かった。

「長距離攻撃だと!？」

フェイトのトライデントスマッシュシャーに、アレスが目を見開き驚愕する。

プラズマランサーとは比にならないほどの速度で近づき、なおかつ高威力とを感じるソレは、アレスには避けることなど不可能だった。

（どうする……！！）

アレスが迫るビームを見据えながら、思考する。

回避は——不可。今からでは確実に、間に合わない。

武器での防御——無意味。あれほどの攻撃を、刀一本で防げるわけがない。

手詰まりの状況にアレスが敗北を認めようとした瞬間、彼は“あること”を思い出した。

なのはとシャーリーにデバイスを渡された時、彼女達は自分に何があると言っていた？

魔力。魔法を使うために使用する元となる力。

これがあるということは、アレスには魔法が使える“はず”だということになる。

だが使えないことを実践するのは、馬鹿としかいえない行

動でしなかった。

だが……

（やってみる価値は十分過ぎるほどある！）

刀を鞘に戻しながら、アレスは何かを決心して、右手を前へ突き出す。

魔力があるなら、自分にも出来るはず。

フェイトやシグナムがやっているように。

「――」

アレスが目を閉じ、ただ思い描く。魔法の使い方なんて知らない。だからこそ思うままに、アレスは念じた。

イメージするのは、盾。

自身を守れるほどの盾を。

完全に防げるモノなど、元から望んでいない。少しだけ、この一撃の威力を抑えるだけの盾を。

「——来いッ!!」

目を開け、アレスが右手を前へ突き出し、願う。

瞬間、アレスの右手から何かが出ていく様な感覚が訪れ、彼の前に三角形の“黒いシールド”が現れた。

「——シールド!？」

魔法を使えないはずのアレスがシールドを展開したことに、フェイトが驚愕する。

アレスも半信半疑、見よう見真似の盾だったが使うことが出来たことに喜びを隠せずに微笑んだ。

フェイトのトライデントスマッシャーが、アレスのシールドに衝突する。

だが次の瞬間、爆風を巻き上げてアレスのシールドが、一瞬で砕け散った。

「がはッ!!」

アレスが爆風によって後ろへと吹き飛ばせる。

防御としてあまり意味が無かったアレスの盾だったが、トライデントスマッシュヤーとの衝突によって生まれた爆風に、彼は運良くフエイトの一撃を免れていた。

「がつ!」

吹き飛ばされたアレスが受け身を取れずに、地面に背中を強打する。肺にある酸素が勝手に吐き出された。

「はああ!」

そしてアレスが立ち上がろうとしている所に、フエイトが彼へ更なる追撃を仕掛けていた。

いつの間にかアレスの間合いにいたフエイトが、金色の刃が付いている“大鎌”を薙ぎ払った。

「このおッ!」

立ち上がり様にアレスが刀を薙ぎ払い、バルディッシュを弾く。次に、体制を立て直しながら彼が刀を振り下ろした。

「っ……！」

縦に下ろされたアレスの刀をフェイトが僅かに身体を逸らし、回避した。

「これならッ！」

フェイトに避けられた刀をアレスが地面にぶつける。
そしてあるうことかアレスが刀の柄から、手を離れたのだった。

「——な！？」

その行動にフェイトの思考が一時、止まった。次に来るアレスの攻撃が予測出来なかったからだ。

アレスの刀が、地面に衝突した反動で宙へ浮き上がる。

そして浮き上がったアレスの刀は、縦に回転しながら、フェイトへ牙を向いた。

（なんて器用な……ッ！）

そのあまりにも無茶苦茶なアレスの攻撃に、フェイトが目を疑う。だがしかしその荒業を彼女は冷静に、バックステップで回避していた。

「――拔刀参式ッ！」

アレスが回転する刀の柄を掴み取る。

すかさずアレスは素早く刀を手前に引き付け、前へ踏み出しながら突きの動作を取った。

「――旋風ッ！！」

声と共に、アレスが前へ踏み込む。その流れのまま、彼はフェイトへ向け、突きを放った。

「ッ！」

突きにフェイトがどうにか身体を右に逸らし回避し、後ろに跳ぶことでアレスから距離を取った。

「痛ッ！！」

しかし距離を取った瞬間、フェイトの左腕に鋭い痛みが走った。

（避けたはずなのに……）

彼女が確認すると、バリアジャケットの袖が切れていて、彼女の腕に浅い切り傷が出来ていた。

確かに、避けた。なのに何故怪我をしているのか。

ただの突きではないことは元からフェイトにもわかっていたが、それがどうやって成せる技なのか彼女には予想すら出来なかった。魔法を使わずして、ただ生身の身体だけで戦うアレスの戦闘力。改めて、フェイトは目の前にいる彼の存在に、戦慄した。

「ハア……ハア……」

そんなフェイトに対し、アレスが肩を動かしながら荒い息遣いをする。

あれだけでも僅かしかフェイトにダメージを与えなかったことに、彼が苛立つ。

そして自身の体力が限界だということに、悔しさが募っていた。戦闘によるダメージと、疲労で身体が限界に近かった。

「なあ……提案なんだが……次で、最後に……しないか？」

途切れ途切れにアレスが提案する。もう満足に戦える余力など彼

には既に無かったからだ。

「……良いよ」

アレスの提案にフェイトが頷き、応じる。

彼女も彼ほどではないが、魔力消費による疲労がかなりきていた。

「なら……行くぞ？」

「……うん」

同時に、二人が構える。

フェイトの前に魔法陣が現れる。先の砲撃、トライデントスマッシュを放とうとする。

「トライデント……」

アレスも鞘に刀を戻して抜刀の構えをする。自身の出せる最高の技を放とうとした。

「奥義……」

同時に、二人が動いた。

「スマッシュ！ーッ！！」

「円衝月牙ッ！！」

フェイトから金色の砲撃が、アレスから特大の斬撃が放たれる。
瞬く間に、ふたつの攻撃が衝突する。

お互いの技が相殺し合い、辺り一帯に煙が舞う。

だが、その中をふたつの影が突き抜けた。

「「はあああっ！！」」

アレスとフェイトが交差しながら互いを斬る。
そうして二人は背が向け、立ち尽くしていた。

「うっ！？」

先に倒れたのは、フェイトだった。膝が崩れ落ち、力無く倒れた。

「勝っ……………た？」

しかし先に倒れたのがフェイトと気づくと、アレスも同じく倒れ、気を失っていた。

こうして、二人の戦いは幕を下ろした。

第九話 模擬戦の結果、そして（前書き）

駄文な作品ですが、どうか気長に見てやってください

感想などもくれたら嬉しいです

第九話 模擬戦の結果、そして

フェイトが目を醒ますと、そこは医務室のベッドの中だった。

ぼんやりとした意識で彼女が布団から起き上がる。
なぜ自分はこんなところで寝ているのだろうか、

「あれ？ 私……どうしたんだっけ？ アレスと……」

はつきりしていく頭を動かして、フェイトが模擬戦のことを思い出す。

確かあの時、自分は……

「そうか……私」

フェイトが小さく呟いた。

——自分は、アレスに

彼女がそう考えていると突然、医務室の扉が開いた。

「あれ？ フェイトちゃん？ 起きたんだね」

医務室の扉が開くと、白い制服姿のなのが入ってきた。

彼女は入るとフェイト寝ているベッドの近くにある椅子に座った。

「うん……」

元氣のない声でフェイトが返す。

「？」

そんな彼女の様子になのはが疑問に思ったが、フェイトはそのまま呟いた。

「私…… 負けちゃった」

消えそうな声で、フェイトが俯く。

勝てなかったことの悔しさ、はやての期待に答えられなかったこと。それらが彼女の心を締め付けた。

だが、次になのはが言う言葉はフェイトの予想外のものだった。

「負けてないよ？」

「え？」

彼女の言葉にフェイトが耳を疑う。最後、アレスの攻撃を受けた自分は倒されたはず。

だから自分はこうして寝ていたのではないか。

「あのね。フェイトちゃんが倒れた後にアレス君も倒れたんだよ。だから引き分けってことになったんだ」

フェイトが呆然とした顔で彼女の話聞く。そしてそういうことかと、納得した。

「そうなんだ……あれ？」

じゃあ引き分けならアレスが仲間になるならないって話はどのようなの？」

勝ち負けで決めた約束が引き分けになってしまった。

“引き分け”については何も決めてはいない。もとい、それは思ってもみなかったことだった。

「うん。それはアレス君が起きてからだね」

「アレス、寝てるの？」

「うん。隣のベッドだよ」

彼女が隣のベッドを指す。流れるままフェイトがその方へ視線を向けると、

「……本当だ」

そこには、静かにアレスが眠っていた。

「それにしても凄かったよ」

彼女がアレスを見ていると唐突になのはが口を開いた。

「何が？」

「模擬戦。フェイトちゃんとシグナムがリミット付きつてのもあったけど、アレス君互角に戦うんだもん」

アレスに視線を向け、なのはが言った。

そう、機動六課に勤めている人達の中、フェイトやなのはを含めた数人には自身の力を制限する『能力限定』が付けられていた。

確かにフェイトには能力限界が付けられている。だが、それでも彼女の实力は普通の魔導師などに劣ることはないのだ。

「うん……最後にシールドを使っただのは驚いたよ」

「私も驚いたよ！ フォワードの皆もアレス君の戦いを見て驚いたもん」

魔法を使えないアレスがシールドを使ったことは驚かざるを得ない。

そして一番の驚くべきことは、フェイトとシグナムを相手に引き分けたことだろう。

「私も驚いてばかりだった。もしアレスが魔法を覚えたら次は勝てないかも……」

ゆえにフェイトは、そう考えずにはいらなかった。

「魔法か……才能あるよ。アレス君」

「だね。私もまだまだ頑張らないと……」

フェイトとなのはが寝ているアレスを見る。

彼のシールドは、フェイトの『トライデントスマッシャー』を防ぐことはできなかったが、初めてにしては、かなり筋が良かった。

「そういえば、今何時？」

眠ってたからわかんなくなっちゃって」

なのはが時計を見る。針は午後の六時を指していた。

「午後六時だね。フォワードメンバーの訓練も終わったから様子見に来たんだよ」

模擬戦を始めたのは午後一時だったので、戦闘時間を引いても四時間ほど眠っていたことになる。

「そんなに寝てたんだ」

フェイトは驚きながら、そう呟いた。

「ん……………ここは？」

その時、眠っていたアレスが目を醒ました。

「ごめん。起こしちゃったかな？」

「いや、大丈夫だ」

なのはに返事をしながらアレスは起き上がると、辺りを見渡して
今いる場所が医務室だと理解した。

そして何故寝ているかを彼はすぐに察した。

「ところで模擬戦の結果はどうなったんだ？」

アレスの質問になのはが続けて答えた。

「両方倒れて引き分けだよ」

「引き分けか……………」

顎に手を置いて、アレスが何かを考え始めた。

「引き分けだけど……どうするの？」

その姿をなのはは不安げに見つめる。彼は、はやてとの約束をどうするのだろうか？

アレスは、そんな彼女の表情を見るだけで、そのことを察した。正直言えば、答えはもう決まっていたことなのだ。

「じゃあ厄介にならせてもらうかな」

それが『仲間に入る』という意味とわかったフェイトとなのはは、目を大きく開いた。

「……良いの？」

驚きを隠せないフェイトが聞き直した。

「ああ、どうせ何があるんでも仲間にさせられそうだしな」

アレスの言っていることに、少なからず二人が同意してしまう。

はやてなら本当にそうするだろう、と彼女たちも何となくわかってしまったからだ。

「でも仲間になるってどういうことだ？ お前たちみたいに働くのか？」

アレスが不思議そうに言うと二人が首を傾げた。彼が言うことに、二人も同じく疑問に思った。

「どうなんだろう？ はやてちゃんに聞いてみる？」

「じゃあ今から部隊長室に行かない？」

フェイトの提案にアレスが頷く。
しかしなのはが二人の身体を心配して反対した。

「寝てなくていいの？」

「寝たからもう大丈夫」

「俺もだ」

フェイトとアレスがベッドから出て、立ち上がる。

「なら良いけど、じゃあ行こうか」

そして三人は医務室を出て、はやてのいる部隊長室に向かうことにした。

それから医務室から部隊長室に向かう途中、三人が廊下を歩いていると、

「俺が言つのもなんだが本当に良いのか？ えっと……」

なのはを見て彼女の名前をアレスが思い出そうとする。
なのはは察して、自分の名前を言った。

「高町なのはだよ。で、何？」

「すまん。高町は良いのか？
俺みたいなのがここに居ても？」

なのはは振り向いて止まるとアレスに人差し指を向けた。

「仲間なんだから、なのはって呼ばないとダメだよ？ あと私は別にぜんぜん大丈夫」

彼女に名前で呼ぶことを強制される。が、特に仲が良いという訳でもないのにいきなり名前で呼ぶのは、アレスには気が引けた。

「でも高町……」

「な・の・は！」

「……なのはさんには悪いが俺はいつ居なくなるかわからないぞ？」

仲間になるが、アレスには目的があった。

その為に彼はなのはたちから姿を消すかもしれない。

「私はアレス君を信じるから良いよ。あと、“なのはさん”より“なのは”で良いんだけどな？」

「それは流石に……」

「ダメ？」

身長差のせいか、上目遣いで言われると男として、アレスは言い

返すことはできなかった。

「わかった……なのは」

「うん！」

名前を呼ばれたのはが抜群の笑顔を作る。

それだけで惚れてしまいそうぐらいの笑顔だった。

「じゃあ俺のことも呼び捨てで構わない」

「私はアレス君で良いよ」

「なんでだ？」

「なんでも」

そのまま微笑ましく思える雰囲気で二人は話し続けた。

「……………」

その間、それを見ていたフェイトが不機嫌そうな顔をしていた。
彼女の存在を思い出したアレスがフェイトに話しかける。

「それと君も良いのか？ えっと……………」

また名前が思い出せないアレスをフェイトが察する。

「フェイト・T・ハラOWN。フェイトで良いよ、私も信じるから」

同じく“信じる”と言われたアレスが顔をしかめる。

信頼されるより不信を抱かせているはずなのに、彼女等は何故こんなに信頼しようとするのだろうか。

アレスには、不思議だった。

「ハラOWNも本当に良いのか？」

「良いつて言ってるでしょ？」

あと私も名前で良いよ。さんは無しで」

なのはと同じ要求に、またアレスは気が引けた。

「いや……しかし」

アレスが話そうとする前にフェイトが口を開いた。

「なのはのことは名前で呼べるのに、私は呼べないの？」

アレスの近くに接近して、目を見てフェイトが言う。
二人の身長差で自然とフェイトが上目遣いになった。
それを見ると、アレスは何も言えなくなる。
全く女に弱いな、と思うしかないアレスであった。

「わかった、フェイト」

「うん！　ありがとう！」

そして彼女は不機嫌そうな顔から一転し、嬉しい顔をしながら前を歩いて行った。

「？」

その表情の変化にアレスは意味がわからず、首を傾げた。

そうして歩いてると、いつの間にか目的地のはやてが居る部隊長室に到着した。

なのはがノックをして先に入って行き、アレスとフェイトもそれに続く。

「どうしたんや？　ってアレス君にフェイトちゃん？　身体はもう大丈夫なん？」

書類仕事をしていたはやてが三人を見た。

なのはたちは入ると、はやての机へ足を運んだ。

「問題ない」

「大丈夫だよ」

そしてアレスとフェイトが頷きながら、答えた。

「そか、それならよかったわ」

二人の返事を聞いたはやてがホッとして息を漏らした。
そして同時に、背後から小さな影が浮き上がった。

「はやてちゃん？　誰か来たんですか？」

アレスの目に映るのは、三十センチほどの物体。
人形のような大きさの“小人”が空を飛んで現れた。

「なっ！？」

流石にアレスも、これには目を見開いて驚いた。

「リイン、この人がアレス君やで」

リインと呼ばれた小人がアレスと聞くと、ああと納得した。

「この人が模擬戦でフェイトさんたちと引き分けた人ですか」

不思議なものを見る目でリインがアレスを観察する。

一方、彼にとっては、このリインと呼ばれる小人の方が不思議
しか思えなかった。

「こら、初対面なのに失礼やで」

はやてに指摘されるとリインは姿勢を整えて、敬礼した。

「すみませんです」。

申し遅れました。機動六課、リインフォースツヴァイ空曹長です。よろしく願います!!」

リインが元気一杯な自己紹介をする。

「……………」

だがとりあえず、アレスは啞然とした。
まだ目の前にいるモノが信じられないような顔をして。
なのはとフェイトは、彼のそんな様子見ると笑い出した。

「アレスはリインを初めて見るんだもんね」

「その反応が普通か」

次にリインを見て、二人がまた笑い出す。
その反応にリインが不思議そうに二人を見た。
はやてはわかっていゝらしく微笑むばかり、
そしてリインがようやく自分が笑いの種になっているとわかると
顔を赤くして怒った。

「なんでリインを見て二人は笑ってるんですかー!?」

「ごめんリイン、アレスの反応を見たらつい……ぷっ」

笑いを堪えているフェイトなのは。

「アレスさんの反応ですかぁ？」

リインがアレスを見ると、彼が一步前に出て彼女に顔を近づけた。

「なっ……なんですか？」

じつと見られていることにリインが後ずさり、動揺する。
アレスはそのまましばらくリインを見ると疑問符を浮かべて問い掛けた。

「リインフォースさんに失礼なことを聞くが……なんでそんな大きななんだ？」

「私は“祝福の風”リインフォース？です！」

腰に手を当てて誇らしげにリインは言い張った。

「祝福の風？」

全く意味がわからないアレスが聞き返す。

「リインはユニゾンデバイスなんよ」

“ユニゾンデバイス”とは別名『融合機デバイス』とも言われている。文字通りで使用者と融合して能力増幅などができるデバイスのことだ。

デバイスについてなのはとシャーリーから話を聞いていたアレスだが、実物を見るとやはり驚いていた。

「話には聞いていたが、まさか本当にこんなに小さいなんて……」
「女性に小さいなんて失礼ですよー!!」

そう叫ぶとリインがアレスに飛び、頭を何度もポカポカと殴り始めた。

しかし彼女の腕力では痛みも感じず、周りから見れば可愛らしいだけだった。

「わるかったよ、許してくれ」
「もうそのくらいにしてあげなリイン」

頬を膨らませたリインが、はやてのところに戻っていく。

「わかりましたです。あと私のことはリインで良いです」
「うちもはやてでええからな」

なのはとフェイト同様、呼べたらずは無く強制なのだろうとアレスは思った。

「わかった。リイン、はやて」

「はいです」

「よろしくな」

「ところで三人は何しに来たん？」

はやてが来た理由を三人に聞く。
医務室で寝ていたのにわざわざ来るといふことには、何か理由があるのだろう、と彼女が思った。

「ちよつとした報告。」

アレス君六課に居てくれるって」

「え！！　ほんま！？　引き分けやったのに？」

椅子から立ち上がったはやてがアレスを見た。

「しばらくの間な、それで俺はどういう待遇でいるんだ？　働くのか？」

「そかそか、それは良かった！　もうそれは決めてあるんよ」

はやてがうんうんと何度も頷く。

「どうするのはやて？」

フェイトが聞くと、はやてはこう言った。

「アレス君は保護するっていう形で六課にいてもらうで」

「えっ？　ならダメだったらどうしたの？」

そしてなのはが聞き、次にはやてが返した言葉に、彼女は啞然とした。

「え？　もちろん、無理矢理にでも保護するに決まってるやないか？」

「……………」

身も蓋も無いことを言い出したはやてに、アレスとフェイトも言葉無くした。

そうするのならなんで二人は戦ったのか。
はやては、続けてこう言ったのだった。

「自主性が大事なんよ」

それからはやてから詳しいことを聞くところだった。
はやて達がいる“機動六課”には『一年間の試験運用期間』があるらしい。

はやてが言うには、その期限があと一ヶ月に迫っていて、そんな部隊に今から新隊員を入れることが大変らしい。

「なら俺は一体何をしたら良いんだ？」

「保護っていうても民間の協力者としてうちらと一緒にコアを探し
てくれればええよ」

「……それだけか？」

「それと騎士団についても一緒に戦って欲しいんや」

コアの探索に騎士団との闘いについては、アレスが今までしていたことと変わらなかった。

「わかった」

そうアレスが答えるとはやてが手を差し出し、握手を促す。

「よろしくな、アレス君」

「短い間かもしれないが…… よろしく頼む」

そう言っアレスは、はやての手を握る。

——こうして、アレスが民間協力者として機動六課の仲間入りを果たしたのだった。

第十話 出会い、少女、食堂にて（前書き）

駄文な作品ですが、どうか気長に見てやってください

感想などもくれたら嬉しいです

第十話 出会い、少女、食堂にて

アレスが機動六課の仲間入りを果たした頃、時間は夕食時になっていた。

そこでアレスを含めた五人は夕食を取るため、食堂へ向かっていた。

「さて、フォワードのみんないるかな？」

「多分いると思うよ？ 訓練終わってシャワールームに行ってもちようど良い時間だし」

はやてが言うとなのはが顎に指を立てて答える。

「じゃあアレスを紹介できるね」

なのはの言葉を聞いたフェイトが嬉しそうにした。

「はいです！」

そして彼女の肩に乗っているリインもそれに同意した。

「なんのことだ？」

なのはたち四人が盛り上がっているなか、アレスには何のことかわからず聞き返した。

「行けばわかるよ」

「？」

フェイトに言われるが訳がわからず、アレスはただ小首を傾げながらも、前を歩くはやてたちについて行くだけだった。

「あつ！　なのはさん！」

アレスたちが食堂に着くと一人の呼び声が響いた。

夕食時である騒がしい食堂の中、なのは達に中央のテーブルに座っていたスバルが席を立ち、手を振っていた。

スバルの反応を見て、同じテーブルに座っていた他の三人も立ち上がった。

「なのはさん達も夕食ですか？」

「そうだよ」

スバルの質問になのはがそう言うと、彼女のいるテーブルへ五人は向かった。

「あの……そちらの方は……」

五人が着く途端、桃色のセミロングの少女がアレスを凝視する。
隣にいる赤髪の少年もアレスに視線を向けていた。

「みんなも知ってる人だと思うけど、今日から六課の民間協力者になったこちら……」

そう言いながらフェイトがアレスを見て自己紹介を促す。
目が合ったアレスがそれに気づき、

「アレス・ラインハートだ。よろしく頼む」

と自己紹介をした。

「「「「!?」」」」

アレスが民間協力者になったことに四人が驚いたのは、言うまでもなかった。

「さあ、みんなも自己紹介や」

だが、はやてがそう言うのと驚いていたスバルが気を取り直して、一番に敬礼した。

「始めまして!! 機動六課、スターズ分隊所属。スバル・ナカジ
マ一等陸士です」

続けて他の三人も敬礼し、自己紹介を始めた。

「同じくスターズ分隊所属。ティアナ・ランスター一等陸士です」
「ライティング分隊所属。エリオ・モンディアル二等陸士です!!」

赤髪の少年、エリオからセミロングの少女が続いた。

「同じく……ライティング分隊所属の、キャロ・ル・ルシエ二等陸

士……です」

アレスが四人の名前を忘れないように顔をそれぞれ見る。

物覚えが良かったりするアレスだが、人の名前を覚えるのが苦手であつたりした。

「これからよろしく頼む……あと呼び方はアレスでいい。堅苦しいのは嫌いでね」

アレスがそう言うのと元気いっぱいが第一印象のスバルが手を上げた。

「はいっ！　なら私もスバルで良いです！」

スバルを見たエリオが真似して、同じく手を上げた。

「じゃあ僕も、エリオで良いです！」

その姿は、エリオに歳相応な元気さを出していた。

「ああ、よろしくな。スバル、エリオ」

そんな二人に笑いながらアレスが言うと、スバルとエリオも笑顔で返事をした。

「「はいっ！」」

元気の良い返事を聞いたあと、アレスはティアナとキャロに振り向くと、

「よろしくな。ランスターにルシエ」

「はい……よろしくお願いします。アレスさん」

「よろしく……お願いします」

何か不振なものを見る目をするティアナに、他人行儀な態度で元気がないキャロの二人にフェイトが違和感を覚えた。

明らかに好意ではなく、困惑や嫌悪に近い視線であることを彼女は感じた。

「……………」

察するに、まだアレスが二人に仲間として認められていないのだろっ。

魔法を使わないで戦い、人間離れしているアレスをティアナにキ

ヤロが、どんな風に見ているのかわからない。

だが今のところは、確実に良い印象を持たれていない。

流石にこればかりは本人が決め、判断すること。自分がどう言うおうと本人が決めなければ、意味がない。

だからフェイトは時間が解決してくれることを、切実に、一人祈った。

「よしっ！！　じゃあ自己紹介も終わったことやし、夕食にしよう？」

「僕も手伝います」

「私も！」

はやてが食事を取りに行くと、エリオにスバルが彼女に続いて行った。

だが結局、フォワードメンバー全員がはやてを手伝いに行っていた。

「リインも一緒に行くです」

「そうだね。なのはとアレスは座って待ってて」

リインとフェイトも二人をテーブルに座わらせ、はやてを追い掛けて行った。

その流れで、アレスとなのはが二人きりになる。

アレスがはやてたちを見ると、スバル達が楽しそうに笑っていた。

「……嫌われたかな？」

その中のキヤロとティアナを見た彼が呟く。
なのはも、それに気づいていた。

「多分、違うと思うよ」

「そうか？」

「スバルとエリオには好かれてるみたいだから……きっと、すぐに仲良くなれるよ」

キヤロやティアナは不安なんだろうと、なのはは思う。

あまりに相手が自分と違い過ぎるとわかると、人はソレを拒む。

だから二人は、目の前にいるアレスに近寄ろうとしない。

しかしその理由が改善されれば、アレスと一緒にいることで二人の中で何かが変われば、きっと彼と仲良くなれる時が来るに違いない。

そう、彼女は思った。

「なら良いんだがな」

「そうだね……あ！ はやてちゃんたちが来たみたい」

なのはがそう言うと、いつの間にか彼女の横にフェイトが立っていた。

「二人ともお待たせ！」

「お疲れ様。ありがとう、フェイトちゃん」

はやてたちが運んできた食事をテーブルに並べる。

テーブルはフォワードメンバー四人とアレス達の五人に分かれ、隣同士になるように座り、彼等は夕食を開始した。

「おお……」

早速、夕食を口にしたところで、アレスから感動の声が漏れる。

機動六課の食事はアレスの口に合い、とても美味しかったからだ。そしてアレスが黙々と食べていると、フォワードメンバーの机から彼を呼ぶ声が聞こえた。

「アレスさん！」

エリオがアレスに話しかけていた。

「ん？ どうした？」

食事していた手を止め、アレスが顔をエリオへ向ける。
すると、エリオは子供の様な無垢で、わくわくした顔を作っていると言った。

「今日の模擬戦凄かったです！ どうしたらあんなに強くなれるんですか？」

『……………』

エリオの質問に、知らない間に全員が聞き耳を立てる。
誰も今だ聞いたことがないことでもあった為、なのはたちもかなり気になっていたからだ。

「そんなに凄かったか？ 別に毎日努力していただけだよ」

「いや、十分凄いですよ？」

アレスの答えに、夕食を食べながらスバルが口を挟む。

「実際イカサマジみた強さやしな。うちも気になるわ」

アレスとエリオの話聞いていたはやてが箸を止めていた。聞く気満々であるらしい。

「別に俺より強い奴はいくらでもいる」

すでに夕食を終えたアレスが、頬杖を突きながらぼやく。

「それでもアレスは強いよ」

「そうだよ。あと気になるのがアレス君の技だよね」

フェイトの言葉に、なのはが思い出して付け加えた。

「あの刀を抜くときに言ってたやつですよね？」

エリオがすぐに答える。アレスの技には彼も気になっていたらしい。

「確か“拔刀壱式”とか言ってたよね」

実際に戦ったフェイトが言うとなのはが頷いていた。

「俺の技か……別にたいしたことじゃない。鞘から刀を抜く時に少しコツがあるだけだ」

「少し、じゃないと思うのは私だけ？」

スバルが呆れてる風に言ったが、フェイトはそのまま続けて質問した。

「でも技の名前があるってことは……自分で考えたの？」

「半分だけな。もう半分は俺の師匠みたいな人が考えた」

昔を思い出すようにアレスが目を細めた。

何か近寄り難い、先程とは違う雰囲気を感じ出す。

これは触れはいけない、と思ったエリオは、他に気になる質問をした。

「その技って全部で何種類あるんですか？」

数字が付いているなら種類があるとエリオが思った。

「基礎となる技は壱から五まであるんだが、俺は四までしか使えない」

「詳しいこと聞いても良い？」

興味があつたのはが詳しいことが知りたくなり、彼に追求する。アレスはそれに少し考えたように、間を置くと、

「別に減るもんじゃないから良いぞ」

一息おいて、彼がお茶を飲み、喉を潤した。

「さっき言ったが俺の使う『抜刀術』は刀を抜く時にコツがいるんだ。」

まず抜刀壱式“一閃”。己の全ての力を乗せた神速の一撃。カウンターにも使えるな」

「私が初めてあつた時に吹き飛ばされた技だね」

直に受けたフェイトが言う。アレスがそれに頷く。

「そうだ。次は式式“衝破”。風を作る技だ。主に飛び道具の無力化などに使う。

参式“旋風”は突き。四式“天駆”は鞘を相手に飛ばす。どちらも攻撃に使う技だ。

ちなみに、フェイトと戦った時には全て使っている」

アレスが話し終わるとなのはが先程のことを思い出す。疑問に思ったことがあった。

「あれ五式は？ 全部で五つなんじゃ？」

やはり言われたという感じでアレスが苦い顔をした。

「……五式は使えないんだよ。正確には教えてくれなかったんだ。壱から参が俺。四と五が俺の師匠が考えたからな」

なのはが「なるほど」と言っただけで納得する。

だが、みんなにひとつだけ疑問が生まれた。

アレスでこれだけの強さ。

なら……アレスの師匠ってどれだけ強いんだろう、と。

「なのはママ〜！」

それから全員が夕食を終えると、食堂の入口から幼い声が響いた。アレスが見てみると、長い金髪を揺らしながら、可愛い女の子が走って来ていた。

「ヴィヴィオ〜！」

走って来るヴィヴィオをなのはが椅子から立ち上がり、受け止めて抱き上げた。

「ヴィヴィオ、ご飯はもう食べたの？」

「うん、なのはママもご飯食べたの？」

「そうだよ。明日は一緒に食べようね」

「うん！」

仲の良さそうな二人をアレスが呆然と眺める。そして彼が思ったことを口にした。

「なのはママ？　そうか……なのははもう結婚してたんだな」
「へっ？」

アレスの言葉でなのはが素っ頓狂な声を出す。

「おめでとう。相手はどんな人なんだ？ いや、待てよ？ その娘を見る辺り……なのはって結婚したの何歳だ？」

ママと言われる子供と一緒にいることは、母親で腹を痛めて産んだのだろう。

手に顎をおいてアレスが真剣に考え始めた。

「いやいや！ 結婚してないよ！！ 私まだ十九歳だし！！」

「十九歳？ てことはその子を見ると大体十歳ぐらいで結婚したんだな」

「ぷっ……」

アレスがそう言うとはやてが口を押さえて笑い出した。
それになのはは全力で否定した。

「だから結婚してないって！

しかも十歳じゃまだ結婚できないよ！」

「でもなのはママって」

「……アレス、私が説明するよ」

なのはの誤解を解くため、見兼ねたフェイトが彼に“なぜなのはがママと呼ばれているのか”を説明した。

簡単に言つと、以前に起こった“ある事件”で保護されたヴィヴ

イオをなのはが引き取ったということだった。
フェイトも後見人らしく、つまりはヴィヴィオにとっては二人の
ママがいることになるらしい。

「へえ……なんか凄いな。ママが二人か……」

話を聞いたアレスがヴィヴィオを見ると、彼女もアレスの視線に
気づいた。

「なのはママ、この人だれ？」

「この人はね、アレス君で言って私のお友達だよ」

“なのはの友達”と聞いたヴィヴィオがアレスをじっと見つめた。

「ほらヴィヴィオ、ちゃんと挨拶しないと……」

なのはが抱き上げたヴィヴィオを降ろしてアレスに向き合わせる。
右目が翡翠、左目が紅玉のオッドアイがアレスを見つめる。

瞬間、アレスは知らずに息を呑んでいた。

その目があまりに印象的で、何か秘められた神々しさを、この少
女に感じていた。

しかしすぐに冷静さを取り戻し、アレスは少女を見つめ返した。

「高町ヴィヴィオ、五才です。よろしくおねがいします」

しばらくアレスを見たあと、ヴィヴィオがぺこりと挨拶をした。
きちんと頭を下げて礼をする辺り、なのはたちの教育がちゃんと
しているのだろう。

とてもいい子だ、とアレスは思った。

アレスは椅子から立ち、ヴィヴィオに目線を合わせるようにしゃ
がみ込むと、

「俺はアレスって名前だ。よろしく、ヴィヴィオ」

そう言ってアレスはヴィヴィオの頭を撫でた。

「ん……！」

その手をヴィヴィオは拒むことなく、緩んだ顔をして受け入れた。
アレスの手は温かく、お父さんみたいだった。

そしてそのままヴィヴィオが抱き着くと、アレスは彼女を抱き上
げていた。

「ヴィヴィオが懐いてる……」

その光景にスバルが驚く。

ヴィヴィオは人見知りが激しい。以前、スバルたちフォワードメンバーも最初は懐かれるまでかなり時間が必要だった。

「ヴィヴィオに好かれちゃったかな？」

なのはもヴィヴィオが初めて会う人に、人見知りせずに懐いたこととかなり驚いていた。

「そうなら嬉しいな、さあそろそろ……ってあれ？」

「どうしたの？」

フェイトが見るとアレスがヴィヴィオを見て、あたふたしていた。そしてなのはやフェイトに困った顔を向け、こう言った。

「ヴィヴィオが寝てる……ついでに手がしっかり服掴んで離れない」

なのはが確認すると、ヴィヴィオは確かに彼に抱き着いたまま寝息を立てていた。

「あ……ホントだ。

ごめんねアレス君、ヴィヴィオが迷惑かけちゃって……」

寝息を立てているヴィヴィオを、アレスが引きはがそうとしてみるが、やはり外れず、結局そのままにしていることにした。

「軽いから大丈夫だ」

気にする重さでなく毎日ご飯を食べているか心配になるくらいヴィヴィオは軽かった。

「でもそのままじゃ風邪引いちゃうから、ヴィヴィオを部屋で寝かさないと」

言っで、フェイトが立ち上がる。なのはも同じくらしく「うんと頷いた。

「じゃあアレス君についての細かい作業とかはこっちでやっておくさかい、安心してな」

はやての気遣いに感謝しつつアレスは礼を言った。

「ありがとう。じゃあみんな、またな」

アレスは座っていたフォワードメンバーにそう言い残し、フェイトとなのはと一緒に食堂から出て行った。

アレスたちが立ち去ると、食堂が少しだけ静かになった。

その後、はやてはアレスについての書類をまとめるため、部隊長室へ戻って行った。

リインも一緒に行き、テーブルに残ったのはフォワードメンバーの四人だけになった。

「思ってたより全然いい人ですよね」

エリオがアレスについての印象を話す。

「そうだね。私もそう思うよ。でも、なんでティアは元気なかったの？」

アレスに対して好印象だった二人と違い、何か暗いティアナやキヤロを見て、スバルが首を傾げた。

「なんかね。あの人……私たちとは違う世界の人みたいに感じちゃって」

それがティアナの“魔法を使わずに能力限定付きのフェイトとシグナムに互角で戦っていた”アレスの印象だった。

だが、彼女がそう思うのは普通の反応かもしれない。魔法を使わない、まるで化け物のような強さに普通に怯えてもおかしくはなかった。

「私も、似たような感じです」

今まで口を閉ざしていたキヤロも同じ思いだった。あまりに、違い過ぎる。それがただ、怖かった。

「僕はそうは思いませんでしたよ？」

「私も」

だがエリオとスバルは全く違ったらしい。続けて、スバルはこう言ったのだった。

「優しい人……だと思っただよね。よくわかんないんだけど、あの
人見てるとそう思っただ」

第十一話 約束（前書き）

駄文な作品ですが、どうか気長に見てやってください

感想などもくれたら嬉しいです

第十一話 約束

ほどなくして、アレスが歩くと彼女達の部屋に到着した。

アレスの腕の中では、いまだヴィヴィオが目覚める様子もなく、スヤスヤと眠っていた。

「入っていいよ」

部屋の前にな着くとフェイトにそう言われ、アレスは中へと入って行った。

彼女達の部屋の中は、流石女の子と言うぐらい綺麗に片付いていた。ベッドの近くには壁に写真が幾つか貼られてあった。

「じゃあベッドにヴィヴィオを寝かせてくれるかな？」

続いて、入ったなのはがベッドを指す。

アレスは頷いて、ヴィヴィオをベッドに寝かそうとしたのだが――

「駄目だ。やっぱり離れてくれない」

ヴィヴィオの手はアレスを離そうとはしなかった。

彼が無理に引き離そうとしても嫌がつて、余計にしがみついてしまう。

途方に暮れたアレスは、それでもヴィヴィオをすぐに寝かせられるように、二人に許可を貰い、ベッドへ腰を下ろした。

「困ったね……私、まだ仕事残ってるんだよ」

彼の中で眠っているヴィヴィオを見てなのはが困り果てる。彼女には、まだ書類仕事が残されていた。

「なら私がアレスと二人でヴィヴィオ見てるよ？ 今日は何もないし」

そこへ何気なくフェイトが言い出した。

「……うん」

フェイトの提案になのはは顔をしかめる。流石に、アレスに迷惑じゃないかと彼女は思った。

「でも、アレス君は良いの？」

恐る恐るなのはアレスに聞いた。

「俺は別にやることないから大丈夫だ」

それにアレスが快く承諾した。特にやることがなかった彼には断る理由はなかった。

「ありがとう。なら私行ってくるね」

彼の返事に安心したなのはが部屋を出て行こうとした。

「ちょっと待て」

しかしなのはが背を向けた瞬間、アレスは彼女を引き止めた。

「なに？」となのはが振り向く。

「頼みがある。戻って来るとき、はやてに俺はどこで寝ればいいのか聞いてくれないか？」

苦笑いして話す彼の言葉に、なのはが「ああ」と相槌を打った。機動六課にいることになったアレスだが、考えてみればどこで寝

泊まりすれば良いのか全く話していなかった。

「じゃあ、後ではやてちゃんに聞いておくよ」

そう言い残して、なのはは部屋から出て行った。

「……………」

なのはが出ていくと、自然と部屋が静かになった。
部屋で聞こえるのは、ヴィヴィオの寝息だけ。
とりあえずフェイトは、ベッドに座っているアレスの隣に座った。

それからふたりきりになって数分、お互い何も言わずに、ただ時間過ぎていく。

「……………」

沈黙に耐え兼ねたフェイトが何かを話そうとするが、何を話したら良いのかわからず、口ごもってしまふ。

「……」

対しアレスも表情に出さないが、内心かなり焦っていた。
現在、ヴィヴィオが寝ているが、ほとんどフェイトとふたりきりの状態。

しかも彼女は美人でスタイルも良い。
男である以上、緊張しない訳はない。

「……ねえ」

突然の呼びかけにアレスが驚く。しかしそれを顔に出さないよう自然に振る舞った。

「なんだ？」

「どうしてここにいることにしたの？」

模擬戦が引き分けだったのに六課に残ることにしたアレスのことが彼女には不思議だった。
はやてが無理矢理にでも居させると言っていたがアレスなら逃げるはずだ。

あんなにコアに執着していたのだ。何が何でもコアを探したいに違いない。

「なんかな……フェイトやはやて達に興味が沸いたんだ」

「興味？」

フェイトは首を傾げた。

「あの時、俺に怒ったフェイト、自分の道をまっすぐ進むはやて、それになるのはたちと居てみたいと思ったんだよ」

その時の彼女たちを思い出したアレスが笑みを作る。

「でも、コアはどうするの？」

フェイトが思っていた疑問をぶつける。

そうすると寝ているヴィヴィオを見ていたアレスの双眸が、フェイトに向けられた。

「探すさ……俺は必ずコアを探さなくてはいけない。これは変わらないんだ」

フェイトが、その眼を見る。

何か強い感情が込められた瞳が、彼女を見ていた。

そしてフェイトは、これでハッキリした。

彼には、秘密がある。

それがコアについてかどうかはわからない。

でもその時、フェイトは、ただ彼のことを知りたいと切実に思った。

「ねえ……前に聞けなかったコアを集めてる理由、聞いてもいい？」

その質問にアレスは顔を歪ませる。なにか思い詰めたような顔。以前、なのはが聞いた時、彼は答えなかった。だから彼女は断られるのを覚悟で、アレスへ聞いていた。

「ただ……約束したんだよ」

アレスがぼつりと呟いた。

「約束？」

「ああ……俺の師匠みたいな人とな」

懐かしむように目を細めながらアレスは言った。

「その人……今はどうしてるの？」

そんな表情を見て、彼の過去に何かをあるのは明白だった。一体彼にとって、その人はどういう人なのか。

アレスは小さかったがしっかりと聞き取れる声で呟いた。

「死んだよ」

「えっ!？」

フェイトが動揺を隠せずに驚く。まさか、死んでいるとは思わなかった。

「……ごめん」

ゆえに、彼女には謝ることしかできなかった。

「別に気にしてないさ」

アレスが笑いながら答える。だが、その目は少しでも寂しそうだった。

「……どんな人だったの？ 女の子？」

本当は聞きたくはなかった。

でも、もしかしたらその人が今のアレスをコアに執着させているのかもしれない。

そう思うと、自然と口が動いていた。

「女だ。俺より強くてな、綺麗な人だったよ」

どこか誇らしげにアレスは言っていた。

女。そして綺麗な人と聞いたフェイトに新しい疑問が生まれた。
また、自然に口が動いた。

「……好きだったの？」

「えっ？」

アレスは予想外と言う言葉がピッタリな顔をしてフェイトを見ていた。

「好きだったの？ その人？」

そしてフェイトはアレスの目をしっかりと見て、もう一度言った。
あくまで彼がコアを集めてる理由を知りたいためと、彼女が自分に言い聞かせる。

なんでこんなことをアレスに聞いているのか、フェイト自身もよ

くわかっていなかった。

何故か、聞きたくなってしまふ。そんな衝動が彼女を襲っていた。

「違うかな。もうわからないが、多分そういうんじゃないと思う」

ぶつかり合う視線を下に逸らし、アレスが呟いた。

もういない人のことを思い出してもその時の気持ちは、もう彼にはわからなかったからだ。

「そうなんだ……でも、なんでその人とコアを集めてる約束をしたの？」

一番聞かれたくないだろうその理由をフェイトが聞く。
今なら答えてくれるかもとフェイトはアレスに期待した。

「それは……」

アレスは口を少し開けたまま固まる。

このまま、彼は話すのだろうか。

彼の口が、動こうとする。

「アレス君いる？」

しかしそれは、突然の来訪者によって止められた。

フェイトは声が聞こえると、扉を開けるためにベッドから立ち上がった。

「はいって……はやて？」

彼女が扉を開けると、そこにはやてが立っていた。

「いや、なのはちゃんからアレス君の部屋決めてなかったって聞いてな。」

ちやうど仕事も終わったし、知らせるために来たってわけや」

はやてが部屋の奥にいるアレスを見ると笑みを作った。

「もしかしてお邪魔やった？」

はやてがフェイトにしか聞こえないように声を抑える。その声は、何かと楽しそうだった。

「もう！ そんなじゃないよ」

フェイトがアレスのところに戻っていく。

「そう？　ならえんやけど」

心なしか楽しそうに、はやてが続いて部屋に入った。
はやてがアレスを見ると、ようやくヴィヴィオを身体から離して
ベッドに寝かせていた。

「おやすみ、ヴィヴィオ」

アレスが頭を撫でると嬉しいそうにヴィヴィオが微笑んだ。

「ん……」

その笑顔は天使のように可愛かった。

「ヴィヴィオ離れたんだね」

「ああ、ちゃんと寝かせてやったよ」

アレスが安心してホッと息を漏らす。

あのままはやてが来なければ、きっと話していただろうと思っていた。

「ごめんね、迷惑かけて」

フェイトが彼からコアを集めてる理由を聞けなかったことを内心残念がる。

でも、それはいつか彼が話してくれるのを待つことにしよう。フェイトは思うことにした。

「気にしないから大丈夫だ」

アレスはベッドから立ち上がり部屋から出ていこうとする。だが突然、扉の前でアレスが止まると、

「また明日な、おやすみフェイト」

そう言ってアレスが部屋から出て行った。

「うん。おやすみアレス、はやて」

「おやすみな〜フェイトちゃん」

はやても部屋を出ていく。

アレスとはやてが出ていくとフェイトはひとり呟いた。

「約束……か」

はやてに案内されて、アレスがある部屋の前に着く。

「ここがアレス君の部屋や」

はやてにそう促され、扉を開けてアレスは中に入った。

中には家具もなにもなくベッドだけだったが、きちんと掃除が行き渡っていて清潔な部屋だった。

詳しく見ればシャワーやキッチンなども付いていて、ひとりの部屋には申し分なかった。

「良いのか？　こんな部屋使って？」

部屋を見渡したアレスが入口にいるはやてのところに戻る。

「大丈夫、みんな一緒や」

更に全員がこんな部屋を使っていると聞くと機動六課の凄さを思い知らされた気がした。

「そうか。じゃあもう寝るよ」

フェイトの一件から無性に疲れたアレスは早く寝たくなり、彼女に出ていくように促した。

だが、はやては後ろで手を組んで前屈みになると、とびきりの笑顔でこんなことを言い出した。

「もしひとりで寝るの寂しいなら……一緒に寝たらかあ？」
「……………はあ！？」

目を皿のように広く開いてアレスは驚く。

「なんて冗談や。じゃあ、また明日な」

そう言って風のように走り去っていくはやてをアレスは呆然と眺めていた。

その後、アレスがベッドで寝ようとするが、

「寝れない……」

はやてのおかげで寝れなかった。

何かといけない考えをしてしまいそうになり、アレスは必死に寝ようと努力するしかなかった。

「なんであんなこと言ったんやろ……。急に恥ずかしくなってもた」

自分の行動に理解できず、はやては自分の部屋にそのまま走って

行く。

こうしてアレスの長い一日がようやく終わりを告げたのだった。

第十二話 早朝の訓練場（前書き）

久々の更新です。

試験勉強やらであまり早めに更新できないかもしれませんが、
長に見守ってやってください・・・
気

第十二話 早朝の訓練場

太陽が上がって間もない頃、何もない部屋で眠っていたアレスが目を開けた。

「朝……」

部屋にある時計を見ると午前四時過ぎを指していた。

二度寝をしようかと思った。しかしそうはせずにアレスは、唯一それしかないはやてたちと同じ男性用制服に着替える。

そして時間潰しに散歩をすることにした。

改めて言うが機動六課という建物はやはり大きかった。

寮から出れば、六課への道と訓練所へと道が分かれている。

アレスが外から六課の建物を眺めた。

どこかの小さい島をそのまま使っているみたいな広さだ。

「こっちに行くか」

そして六課には向かわずアレスは、訓練所へと足を運んだ。

訓練所に行くと誰かにいることにアレスが気づいた。

「ん？」

そこには茶色の髪を横で結ってサイドポニーにしている人がいる。

「なのはか？」

なのはがモニターを触り何かの作業をしていた。

「ん？」

声がしたことに気づきなのはが振り向く。

「アレス君？　こんなに早い時間にどうしたの？」

振り向くとアレスが訓練所にいたことになのはが驚いた。

「早くに起きてな、散歩だよ」

アレスが言う「そっか」と言ってなのはがモニターを再び見た。

「何をしてるんだ？」

早朝からひとりで何をしているのかアレスは気になった。

「フォワードメンバーの早朝訓練の準備だよ。五時からなんだ」

モニターをいじりながら彼女が答える。

フォワードメンバーは早朝、午前、午後と訓練をしていてなのは教官として鍛えているらしい。

「よし、終わりっ」と

なのはが作業を終えてモニターを閉じると、以前アレスがフェイトと闘った島に街が現れた。

「何度見ても凄いな」

街が飛び出すのを見ると不思議と言葉が出てきていた。

「慣れるよ。これから暇？　なら私に付き合ってくれないかな？」

準備を終えて訓練の時間まで三十分ほど余裕ができたので、なのはアレスと話しをすることにした。

「大丈夫だぞ」

アレスも散歩をしてるのだから暇と言われたら暇としか言えなかった。

「アレス君って魔法に興味ある？」

ビームを出したり空を飛べたりしているのを見て魔法に興味を持たないわけではない。

「あるぞ」

「なら教えてあげようか？」

魔法の素質がある彼になのは魔法を教えたかった。
教えられてもいないのにシールドを展開したアレスになのは興味があった。

「良いのか？ でもデバイスは？」

高威力の魔法を使うためにはデバイスが必要だ。

一応、簡単なものならデバイスが無くても使える。

フェイトとの模擬戦のあと、いつの間にかアレスの手からデバイスが無くなった。

「あのデバイスはシャーリーが持ってたよ。アレス君の戦闘データを取ってたんだ」

デバイスをアレスに渡す時、なのはがシャーリーに戦闘データを取る装置を仕組ませておいた。

「戦闘データ？　なんでそんなもの？」

自分の戦闘データなんて何に使うのかアレスにはわからなかった。

「アレス君専用のデバイスを作るためだよ」

デバイスには個人専用を作る時に、使いやすく高性能にするために個人データが必要であった。

もし仲間になった時の為に、なのはは考えていた。

「俺専用のデバイス？」

自分専用ということに実感が得られないアレス。

「早朝訓練が終わったら見に行かない？ もうできてるかも」

自分の為に作ってくれるのは嬉しかった。
でもそこまでの理由はどうしてだろう。

「なんでそんなにしてくれるんだ？ デバイス作るのって金かかるんだろ？」

人口知能があつたり、高性能にするには費用がかかるはずだ。

「仲間なんだから良いんだよ。はやてちゃんも言ってたし、シャーリーも戦闘データ見てたら張り切ってたよ」

模擬戦後、なのはとシャーリーがアレスの戦闘データを見ると驚いた。

刀の熟練度、魔法を使った時の魔力値、個人能力。

全てがとても高い数字を出していた。

なのはがシャーリーにデバイスを作つてと頼むと即答で承諾した。シャーリーは、デバイスを扱うことに一流の腕を持っている。アレスにとって最高のデバイスを作るはずだ。

「仲間……」

仲間になると言つたが、いつかいなくなるかも知れないアレスにとってその言葉は重かった。

でも、ここにいる時間だけ。

自分を信頼をしてくれる人がいるなら。

「そのデバイス、有り難く使わせてもらつよ」

アレスは彼女たちのために頑張っていこうと決めた。

「うん！　なら訓練が終わるまで見学してる？」

なのはが時計を見ればちょうど五時前だった。

「そうさせてもらっよ」

訓練が終わるまでしばらく時間があり、何も知らないアレスはすることになった。

「ちょうどみんな来たみたい」

なのはが言うと同時にスバルの声が聞こえてきた。

「なのはさーん！」

アレスが振り向けばＴシャツにスボンという姿で四人が走っていた。

スバルとティアナが白、エリオとキャロが黒を中心としていた。

時間ぴったりにフォワードメンバーが着くとまずアレスの存在に気づいた。

「アレスさん？ どうしたんです？」

なのはと同じようにスバルがアレスがいることに疑問を抱いた。

「もしかしてアレスさんも訓練ですか？」

エリオの期待に満ち溢れた視線を受けながら、

「いや、なのはに言われて見学をな」

アレスは苦笑して返したのだった。

第十二話 早朝の訓練場（後書き）

感想など頂けたら、嬉しいです。

暇なときにも書いてやってください（笑）

第十三話 デバイスと魔法の訓練（前書き）

長い間、お待たせしました。

ようやく色々とプライベートが落ち着いてくまりましたので

これからも少しずつ更新していくしますので、気長にみてやってください。

感想やら評価等をいただければ、作者も頑張れます！

第十三話 デバイスと魔法の訓練

ヴィータの一撃にアレスが唸る。だが今回も、彼は彼女のアイゼンを受けきった。

そうして二人の動きが止まるとヴィータはアイゼンを肩に担いだ。

「お前、この前初めて魔法使ったんだよね？」

突然の質問にアレスが少し困惑する。

「まあ、そうだな」

その返事に、ヴィータは頭を掻いて呟いた。

「……筋が良すぎる。まるで使うのが、初めてじゃないみたいだ」

アレスは、スバルと同じ様に撃った攻撃を使って間もない魔法で受けきった。

つまりそれは、アレスの魔法の素質を認めるのに他ならなかった。

「そうか？　なら嬉しいな」

そう言っアレスが微笑む。

筋が良いと言われて嬉しくない訳はない。

「憎たらしい奴……」

ぼそつとヴィータが呟いた。

「ならあの時みたいに撃つてきな」

「あの時？」

「あの森で俺を吹き飛ばしたやつ」

ヴィータはアレスを殴り飛ばした一件を思い出すと、あからさまに嫌な顔をした。

「お前、まだあの時のこと根に持ってるのか？」

ヴィータも、あの時のことは流石に悪かったと思っていた。

「もう怒ってなんかいないさ、あれぐらいマジで撃って来いってこと」

——本気のヴィータの一撃が自分に防げるか試したい

ヴィータはアレスが考えていることを察した。

「そういうことかよ。まあ改めて言わせてもらっけど……わかるかな」

申し訳ないと言ったように、ヴィータはアレスから目を逸らして言った。

それがヴィータなりの謝罪なのだろう。

「謝ったなら良いさ、でどうするよ？」

ヴィータは許してくれたことを理解し、笑みを作ってアイゼンを

構えた。

「そんなに喰らいたいならやってやんよ。潰されんなよ?」

「防ぎきってやるさ」

アレスも構え、待ち構える。

同じくして、ヴィータはアイゼンに命じた。

「アイゼン!」

Explosion! Raketenform!

アイゼンの先端がスライドして硝煙を上げる。そして前にアレスを吹き飛ばした時の形に姿を変えた。

「ラーケテン……」

アイゼンのジェット噴射でヴィータの身体が回転する。数回回転して彼女はアレスへ飛び出し、間合いに入った。

「ハンマアアー!」

その叫びと同時に、アレスにアイゼンが叩き込まれた。

「来いッ!」

アレスがバリアを展開し、全力でヴィータのアイゼンを受け止める。

ヴィータのアイゼンとアレスのバリアが押し合った。

「かてえ！」

アイゼンの攻撃に壊れる気配もない頑丈な強度を持つバリアにヴィータが驚く。

やはり、初めてとは思えなかった。

「くっ！」

アレスが踏ん張って耐える。

こんな一撃を自分が身体で受けたと思うと、アレスはぞっとした。

「てりああ！」

そして二人が競り合っていると、突如ヴィータがアイゼンをバリアから一度離れた。

瞬間、彼女はすかさず二撃目をアレスに叩き込んだ。

「うおおっ！」

突然の二撃目にアレスが吹き飛ばされそうになる。

アレスはその勢いと殺し切れず、後ろに身体が持って行かれ、後ろ数メートルでどうにか止まった。

その地面には、足で引きずられた跡が残っていた。

「痛っ！ ヴィータ！ 二回殴るのはずるいだろ！？」

どうにか耐えきったアレスだが、バリアを張った腕がまだ痺れていた。

ヴィータがアイゼンを担ぐ。

「かてえんだから仕方ないだろ？」

当然だと言う風にヴィータは言った。

「お前、当たり前みたいに言うな……」

呆れて言って、アレスは腕をぶらぶらさせた。

「良いじゃねえか？　つかちゃんと守りきったのが驚きだな」
「スバルもあれくらいできるだろ？」

そう言うときアレスはスバルに視線を向けた。

「いやいや！　きついですよ！　私の時よりずっと威力高いですし！」

手をバタバタさせてスバルが主張する。

「確かにあの攻撃はスバルにはちときついな」

スバルの言う通り、ヴィータの一撃はスバルが先程受けていたものより強力だった。

「強度なんてスバルより硬いし踏ん張りもしっかりできてる。才能あるよお前」

ヴィータの思うところ、それは才能あるだけじゃ済まされないレベルであった。

たった数回練習しただけでヴィータの一撃を受けきるのには不可能に近い。

たとえ、どんなに才能があっても。

「本当に見てて凄いですよ。とても初めてには見えません」

スバルもアレスの才能には驚くばかりだった。

「才能……か」

しかしアレスは才能と言う言葉を聞くと、右手を見つめて呟いた。実際、アレスにも何故自分がこんなに魔法を扱うことに秀でているのが不思議だった。

魔法を使うたびに、コツのようなモノが明確に掴めている。自分も馬鹿じゃない。

才能だけで済まされないことは、アレスも思っていた。

「じゃあ休憩入れながら交代でやっていくぞ」

「ああ」

「はい！」

それでも、アレスはわからなくても今できることをすることにした。

「ちなみにアレスはスバルの倍のメニューで行くからな」

ヴィータはアイゼンをアレスに向ける。

「マジかよ」

なのはに嫌われているのか？と思ってしまふアレスだった。

それからしばらく、ヴィータからの訓練を嫌と言うほどスバルとアレスが受けていると、突如島一帯に警報が鳴り響いた。

「なんだ？」

耳に響く轟音にアレスが怪訝な表情を作る。

ヴィータは警報を聞き、すぐにアイゼンを待機モードして、いきなり六課へと走り出した。

「緊急召集だ。スバル！ それにアレスも来い！」

「はい！」

スバルが追い掛けて行く。

「一体なんだ？」

そして状況が掴めないアレスも、二人に続いて六課へ向かって行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3134t/>

魔法少女リリカルなのは～そよ風に想いを～

2011年10月12日07時29分発行